

げられる。基本的には平行沈線文は横位と鋸歯状の2タイプであるが、爪形文・コンパス文が組合されて多様化している。また、平行沈線文には幅広と幅狭のタイプがあり、概して、鋸歯状モチーフを構成するものは幅狭のものに多くみられる。横位の平行沈線文（全周するもの）は2～3箇所の接合点を有し、爪形文、コンパス文と組合されると平行沈線の長さは制約され、モチーフは明確化する。

爪形文は平行沈線文間に連続的あるいは等間隔に充填されるものが一般的に目立つが、胎土に纖維を含まない土器群は概して爪形文のみによって口縁部、胸部括れ部、底部直上などに2～3条施文し、文様帶を構成するケースが多い。

コンパス文については平行沈線文同様に半截竹管による一般的な施文法に加え、集合沈線文が同様の文様効果を出している。また、纖維の有無に拘わらず、爪形文と同様コンパス文のみによる文様構成の場合は口縁部と胸部の括れ部分に1条～2条施文される手法が多用されている。

また、出土率においては上記の文様要素が約9割を占めている。

このような土器の主要文様要素は概して荒川中流域、比企地方を中心とした県西部に多くみられる。しかし、文様帶を構成する主文様等に相違がみられ、該期の遺跡における多様性が指摘できる。また東関東（特に大宮台地、下総台地を中心とした地域）との対比においてはその地域差は顕著である。それは東関東の該期の主な文様要素はループ文、コンパス文、格子目文、肋骨文に、単節及び無節の斜行繩文、撚糸文が一般的であるのに対して、県西部（武藏野台地、柳沢台地、江南台地）の主文様要素は爪形文（連結するもの、有節のものなど）、平行沈線文（鋸歯状モチーフを複合構成するものを含む）に単節及び無節の羽状繩文が斜行繩文に比べて多出化するという相違がみられる。また、文様帶の区画する位置においても、県西部では口縁部文様帶に限られる。

県西部の中では所沢市城遺跡（増田・1970）、都幾川村八幡遺跡（梅沢・1978）、富士見市八ヶ上遺跡（折原・1974）、甘粕原（並木・1978）、薬師堂（曾根原・1981）などが検討資料となるが、上記の遺跡に比べて本遺跡の土器群は

1. 鋸歯状のモチーフは基本的に平行沈線文によって上下に複合される。爪形文で鋸歯状モチーフを構成するものは無纖維のものが多い。
2. 県西部の遺跡の資料としてはコンパス文の出土量は比較的多いが、他の文様との組合さるものや、集合化した沈線によるものが大部分を占める。
3. 無纖維の土器を比較的多く含む住居跡が存在する。

などが相違点としてあげられる。

三ヶ尻林遺跡の土器群は大局的には黒浜期新段階に比定されるものである。本遺跡は住居跡の中での切り合いや拡張、あるいは第11号・12号住居跡のように諸磯期に多い繩文原体の使用などから、集落内での時間的な流れは存在するものの、土器群からは該期の長期的な継続性は認め難い。本遺跡の土器様相（特に半截竹管による平行沈線文の多様性複合バランス、爪形文、コンパス文等の主文様の施文位置、無文の台付浅鉢など）を全体として概観すると、上記の県西部の遺跡よりやや後出的であり、諸磯a期へステップする段階として考えられる。

（星間 孝志）

3. 石器について

はじめに

今回の調査において、小形剣片石器の出土は僅少であり、わずかにチャート製の石匙が1点表掲されただけであった。それに対し、河原石の一部に敲打痕を有するものが多数検出され、本遺跡（集落）の特殊性を物語っているかのようであった。以下この「河原石の一部に敲打痕を有するもの」すなわち「磨製石斧の未成品と思われるもの」を中心に、石器の項をまとめて行きたい。

磨製石斧に対する概観

磨製石斧は全面に研磨が施されるものと、局部（刃部）だけに研磨が施されるものに大別される。局部（刃部）磨製石斧の出現は古く、武藏野台地I b期まで遡ると考えられており、何回かのピークを経て断続的ではあるが縄文時代へと続く。しかし、先土器時代における磨製石斧を系統たてて考える事は難かしく、武藏野台地I b期に卓越する局部（刃部）磨製石斧と、神子柴・長者久保文化に見られる局部（刃部）磨製石斧ではあまりに異なっている。神子柴・長者久保文化を外来文化と考えている人もいる。また、続く撫糸文系土器群の時期に卓越する局部磨製石斧（棒状平偏の河原石の先端だけを研磨したもの）では小型化し、製作の方法は先土器時代のものからまったく変化してしまい、前後を系統たてる事は難かしい。このような局部（刃部）磨製石斧に対し、全面研磨の磨製石斧の出現は意外と遅く、いくつかの例外を除くと^(註1)縄文時代前期黒浜期になって形態が定形化し、乳棒状の磨製石斧が石器組成のなかに安定して含まれるようになると言われている。その意味で、本遺跡（集落）において製作工程の復元可能な資料が検出されたことは、黒浜期の集落内で磨製石斧の製作が行なわれていた事を示しており、注目すべき事だと言える。

製作工程

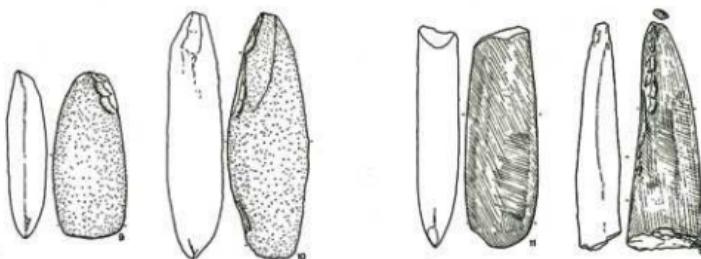
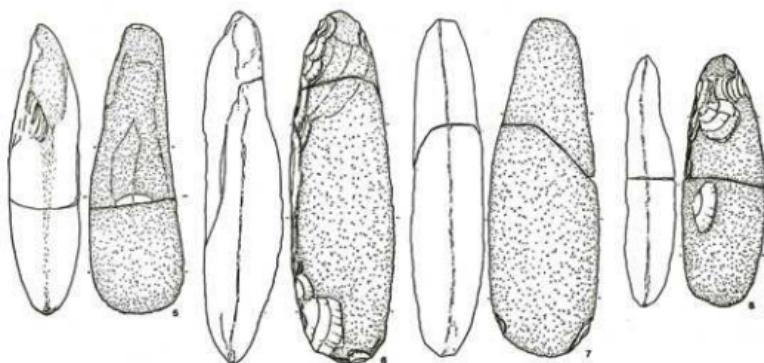
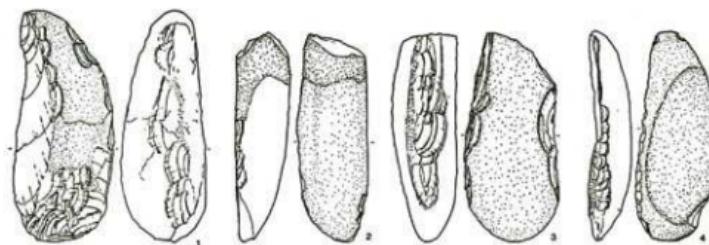
本遺跡から検出された磨製石斧及び未成品の一部を第123図に羅列してみた。1～4は自然面・剥離面を大きく残し、若干の敲打が施されたものを纏めてみた。1・2は磨製石斧とは形状的には隔たりがある。3・4は形状的には磨製石斧に近いが、敲打は部分的にしか施されておらず、形状は河原石の選択の段階で意識されたものと思われる。次に5～6を見ると、全面に敲打が施された形状は磨製石斧として完成されているかに思える。しかし刃部は丸く刃は作られていない、また全てが基部で欠損している点が注意される。9・10は5～8といかに区分するかは問題が残るが、全面に敲打が施され刃部も直線状に作られている。基部での欠損はなく、後は研磨を行なうだけの段階にある。11・12は完成品である。12は刃部を折るように欠損している^(註2)。以上若干の説明を行なったが、次に本資料から想定される製作工程について述べる。

まず第1に復元できるものは、

①河原石を選択し原石とする。

②荒い調整（剥離）→敲打調整を行ない場合によって剥離調整を繰り返す。（1・2）

③④によって形状を磨製石斧の形に整える。（刃部を作っていない段階5～8、と刃部を作った



第123図 三ヶ尻林遺跡出土磨製石斧及び未成品

段階9・10を区分した)。この段階において、基部で2点に欠損したものが目に着くが、敲打調整によるものと思われる^(註3)。

④⑤で形状が磨製石斧となるも(9・10)に研磨を施こし完成させる(11・12)。

と想定したが、①②の段階についてもう少し見ると、

①河原石を選択(形状が磨製石斧に似ているもの)、この過程を重視していると思われる。

②形状の似ている河原石に直接敲打を施こす、敲打によって搬ねて剥離ができる(3・4)。

と想定できるものもある。前者と後者の違いは原石の選択にあり、荒い調整(剥離)はかならずしも行なわれる必要がない事を意味していると言える。それに対し、全面を敲打調整によって形状を作り、研磨を行なう点は共通しており、全面研磨の磨製石斧を作るためには敲打が必要不可欠である事を物語っている。

おわりに

最後に本遺跡から発生する問題点を整理しておく。

初めに磨製石斧の製作跡の報告例は意外と少なく、その内容(製作工程)が明確にされた遺跡は、神奈川県尾崎遺跡が代表的であると言える。尾崎遺跡は縄文時代中期の集落跡であり、酒匂川に近く、河原石を採集するのには欠せない所である。立地的には本遺跡と共通する点が見られる。尾崎遺跡で復元された製作工程と、本遺跡で想定した製作工程の異なる点は、原石の採集の段階で磨製石斧の形状を強く意識していたと考え、河原石を採集し原石とする時点で、選択という意識構造が強く働き、製作工程の内に一段階を形成していたとした点である。これは想定した製作工程の後者になり、縄文時代の石器製作において一つの意義をもつと思われる。しかし、製作自体では本質的には変わらず、全面に敲打を施し、形状を整えた後で研磨している。これは佐原真氏が「石斧再論」において、尾崎遺跡と弥生時代の福岡県今山石斧製作遺跡を比較し、「両者の間には本質的な大きな差が横たわっているとおもえない。」と述べており、縄文時代前期の黒浜期で確立された磨製石斧の製作工程が、若干の変化はあるにせよ本質的に変化する事なく、弥生時代まで続いていると言える。この事は全面研磨の乳棒状の磨製石斧の製作には、技術的な幅が少なかった事を示しているのかもしれない。

次に黒浜式と言う時期を考えてみると、後に続く諸磯式から縄文時代中期と考える人がいるように、中期的文化への幕開けの時期であり、乳棒状の大型石斧というたった一つの石器ではあるが、石器組成の中に急に入り、安定した立場をとる事は、大きな意味を内に含んでいるのではないと思われる。

(西井 幸雄)

註

- 先土器時代では富山県立山町の白岩戻ノ上遺跡において、5点の磨製石斧が検出され、1点に全面研磨が施されていた。時期的にはナイフ形石器に伴うとされている。縄文時代草創期においては、桃の湖遺跡で6点が検出された。そのうち完形品3点を見ると、定角式磨製石斧であった。布佐・余間戸遺跡では4点検出された。そのうち完形品は3点で、全て定角式磨製石斧であった。桃の湖遺跡との共通的のが見らる。月見野遺跡群上野遺跡第1点でも点出土している。発表要旨のため細部は不明であるが、片刃の磨製石斧とされている。

2. 早川正一氏は「磨製石斧」で、黒浜式期の磨製石斧に対し「折断したり刃部を欠損してしまったものが意外に多いことに気付く」と述べている。

3. 尾崎遺跡の報告書で鈴木次郎氏は、「敲打調整を「欠くことのできない重要な作業ではあるが、同時に、ひじょうに注意を要する危険な作業といえる。というのは、敲打調整の力が強すぎると、石器が折れることがあるためである」と、尾崎遺跡の磨製石斧の未成品の欠損の多い点から述べている。

引用・参考文献

- 新井和之（1977）「植房貝塚の土器とその周辺」
奈和 第15号
- 新井和之（1979）「黒浜式土器小考」
日本考古学研究所集報II
- 今井 宏（1982）『緑山遺跡』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第19集
- 梅沢太久夫（1979）「黒浜期の諸問題—埼玉県西部における黒浜式土器」
土曜考古創刊号
- 梅沢太久夫（1978）『八幡遺跡』
比企郡都幾川村教育委員会
- 梅沢太久夫（1981）「平松台遺跡における縄文時代集落の再検討」
台地研究 第21号
- 折原 繁（1974）『ハケ上・打起・北通発掘調査報告書』
富士見市教育委員会
- 岡崎文吉（1977）『佐倉道南』
佐倉道南遺跡調査団
- 小田静夫（1980）「武藏野台地に於ける先土器文化」
神奈川考古第8号、神奈川考古同人会
- 小田静夫（1976）「日本最古の磨製石斧」
どるめん11号 J I C C 出版局
- 金井正三（1982）「縄文前期有尾式土器の再検討」
信濃 第34巻 第4号
- 鴨志田篤二（1980）『遠原貝塚の研究（本編1）』
勝田市文化研究会
- 清藤一順（1975）『飯山満東遺跡』
房総考古資料刊行会
- 栗原文蔵（1977）『殿山』
埼玉県遺跡調査会
- 小林達雄（1965）『土器』『米島貝塚』
庄和町教育委員会
- 小林康男（1974・1975）「縄文時代生産活動の在り方」(1)～(4)
信濃第26巻 第12号、第27巻 第2・4・5号
- 小林康男（1983）「祖成論」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 小菜一夫（1983）「縄文時代早期後半における石器群の様相—南関東地方を中心にして」『研究論集—II』
財團法人東京都埋蔵文化財センター
- 佐原 真（1977）「石斧論—横斧から縱斧へ—」『考古論集—松崎寿と先生六十三歳論文集』
- 佐原 真（1982）「石斧再論」『森貞次郎博士古稀記念古文論集』
- 鈴木道之助（1981）「図録石器の基礎知識III」 縄文 柏書房
- 鈴木次郎（1977）「尾崎遺跡の石器群の特色—特に磨製石斧の製作について」『尾崎遺跡』
神奈川県文化財調査報告 第13集
- 鈴木次郎（1983）「打製石斧」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 曾根原裕明（1981）『秩父・葉姫堂遺跡'79』
両神村葉姫堂遺跡発掘調査会
- 谷井 鮎（1970）『内畠遺跡』
埼玉県遺跡調査会報告書 第7集
- 茅ヶ崎市史（1981）「西方貝塚」
茅ヶ崎市教育委員会
- 戸田哲也・曾根博明（1982）「大和市内における縄文創期遺跡の調査—月見野遺跡群上野遺跡第1地点」
『第6回、神奈川県遺跡調査、研究発表会』 発表要旨
- 中島 宏（1977）『小岩井渡場遺跡』
飯能市教育委員会
- 並木 隆（1978）『甘柏原、ゴシン、露梨子遺跡』
埼玉県遺跡調査会報告書 第35集
- 野中松夫（1981）『木津内貝塚』
埼玉県北葛飾郡杉戸町文化財調査報告書 第4集 杉戸町木津内目沼遺跡調査会
- 早川正一（1983）「磨製石斧」『縄文文化の研究7』 雄山閣
- 古内 茂（1974）『柏市鳩巣遺跡』
房総考古資料刊行会
- 紅村 弘（1974）『柿の湖遺跡』
岐阜県恵那郡板下町教育委員会

- 増田逸朗（1970）『城遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書 第6集
- 松井政信（1981）「布佐・余間戸遺跡出土の石器群について」『布佐・余間戸遺跡』我孫子市布佐・余間戸遺跡調査会
- 松村和男（1983）「磨製石斧について」『前原遺跡』宮代町教育委員会
- 松島吉信（1982）『白岩蔵ノ上遺跡調査概要(2)』立山町教育委員会
- 百瀬新治（1982）『阿久遺跡—長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会
- 山内清男（1929）「関東北に於ける織維土器」史前学雑誌 第1巻2号
- 山内清男（1929）「関東北に於ける織維土器追加第1」史前学雑誌第1巻3号
- 山内清男（1930）「関東北に於ける織維土器追加第2」史前学雑誌 第2巻1号
- 若月省吾（1980）『笠懸村福荷山遺跡』笠懸村埋蔵文化財調査報告書 第3集 群馬県新田群笠懸村教育委員会

V 台 遺 跡

1. 遺跡の概観

台遺跡周辺は沖積地であり、標高は16~17mで、遺跡付近は17.6~18.1mと周辺よりやや高い微高地となっている。この微高地はほぼ南北方向に延びており、遺跡はこれより南西に広がっており、台遺跡はこの北東端にあたるものと思われる。

調査面積は3,400m²で、上越新幹線の東京を基点として、27km815m~28km002mの地点である。調査はこの南東~北西に長い部分に北西から南東へ10mおきに1~22の番号をつけ、又中央から東側をA区、西側をB区としてグリッドを設定した。遺跡付近は現地表下浅い所で-40~50cmで基盤となる埋没ロームと思われる黄褐色土層があり、調査はこの面まで表土を除去して行なった。

調査の結果、検出された遺構は次の通りである。

平安時代初頭の住居跡1軒

古墳時代前期の溝1(推定)

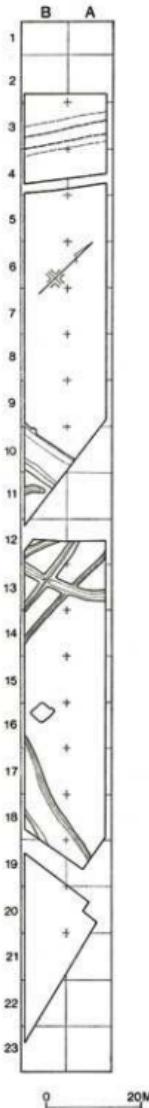
平安時代初頭の溝1

中世の溝2

中世以降の溝8

遺物は縄文時代後期掘之内式土器破片・石斧等、古墳時代前期の小形壺・鉢・高杯、後期の壺・埴輪・須恵器壺、平安時代初頭の土師器壺・須恵器壺・中世の土師質土器・鉢等である。

なお、遺構は少ないながらもA・B-4~13区内にはまとまっており、この外側では元の地形を見ても、黒色土が広く堆積しており、長く湿地であった事がわかる。すぐ北西に隣接した石田堤関係の遺構・遺物は何ら検出されなかった。



第124図 グリッド配置図

2. 調査の経過

昭和54年5月7日、吹上町教育委員会社会教育課長小林氏立会いのもと調査を開始した。既に、新幹線の路線沿いに幅1.5m程の試掘溝を設定して、造構確認面が現表土下50cmとやや深い事が確認されていた為、重機により表土を取り除く作業をまず行なった。調査は区域の南側を東西に横切る農道の南側部分、A・B-20~22区の表土剥ぎから始めた。この部分は埋没ロームと思われるローム層が低く、表土下1m程で、直上には約30cm程の厚さで黒色土帯が多少起伏しながら続いているのが認められ、かなり長い間、湿地化していたものと思われた。特に何らの遺構・遺物も認められず、5月10日、この区域の調査を終了した。

5月11日 A・B-19区から北側の区域の表土剥ぎを始める。試掘時に須恵器・埴輪が出土した地点であり、數カ所の溝状の黒褐色土の落込みと方形の堅穴状の落込みが認められた。重機による表土除去と同時に鋤籠による造構の範囲確認作業も併行して行なった。

5月18日 A・B-12~14区で確認された第1~3号溝の精査を開始した。溝は全般に深く、又、低地の為か、覆土も粘土質でしまっている為、発掘作業はきついものであった。

5月22日 第1号溝完掘。B-16区に確認された堅穴を第1号住居跡とし、十文字にセクションを残し、カマド側から右回りにa~d区とし、掘り始める。

5月23日 調査区域を南北に横切る道路の北側、A-10・B-11区から北側に重機を入れて表土剥ぎを行なう。第1・2・3号溝はセクションを残し、ほぼ完掘する。A-18・19、B-17・18・19区にわたる広い落込みにトレンチを南北方向に設定し調査を開始する。(第5・6号溝)

5月24日 重機による表土剥ぎ終了。B-12区北端で溝を発見し、第4号溝として調査を始める。

5月30日 第5・6号溝掘り進む。6号溝は須恵器破片等の遺物がかなり多く出土している。この頃から測量の為の杭打ちを始める。

6月6日 B-10・11区にかかる広い第7号溝・すぐ南の8号溝の調査進む。7号溝の覆土は黒褐色土の單一土層が堆積しており、この黒褐色土層は更に北に向かって薄く堆積していた。第1号~4号溝平面図作成。

6月11日 第9・10号溝として落込みの調査を行なったが、風倒木痕・自然傾斜等であった。即ち、A・B-10区より北側では南側よりも元の地形は低くなってしまっており、湿地化していたものと思われる。現地形ではほぼ平坦であるが、これは後世(明治以降)の客土によるものと判明した。遺物・造構は検出されなかった。

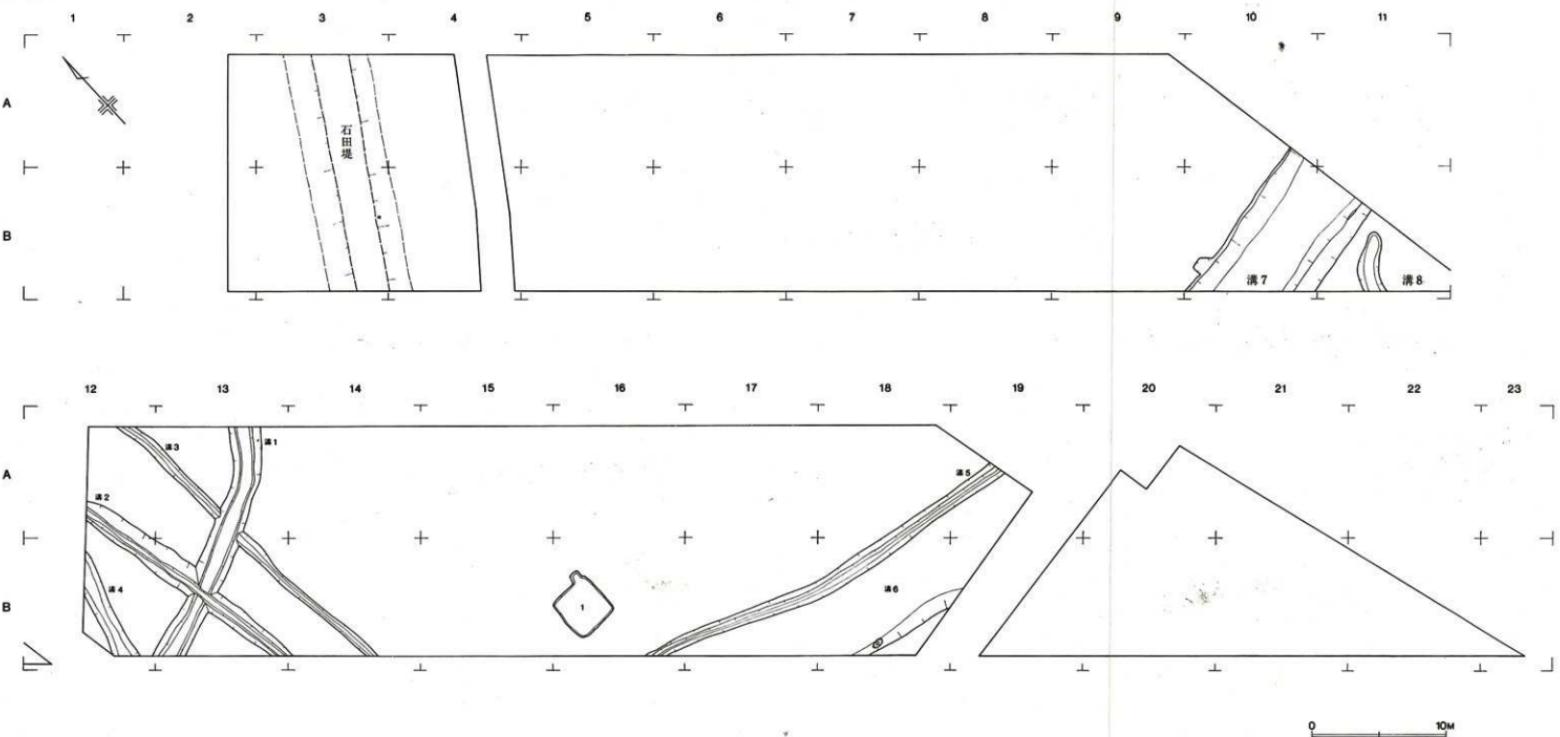
6月18日 この頃から暑く、深い溝の調査の為、難行する。第1~4号溝、5・6号溝、第1号住居跡の写真撮影を終える。この後、順次7・8号溝、北側全景と写真撮影を行なった。

6月26日 吹上中学校生徒見学、図面取り。

6月27日 吹上町文化財保護委員見学。

6月30日 機材の撤収を行ない、全ての調査を終了した。

(大和 修)



第125図 台道跡全測図

3. 遺構と出土遺物

(1) 台遺跡第1号住居跡（第126図）

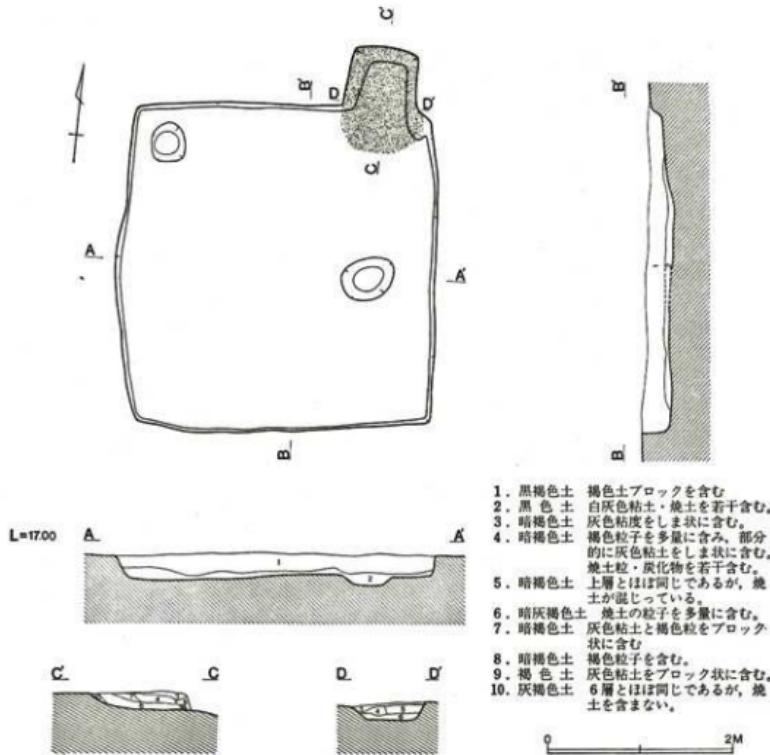
本遺跡内で確認された住居跡はこの1軒だけであった。

大きさは3.5m×3.5mの方形を呈し、主軸の方向はN-1°-Eとほぼ北を向く。

調査はプランと平行する十文字のセクションを残し、カマド側から右まわりにa, b, c, d区として行なった。

覆土は黒褐色土を主とし下層に暗褐色土、部分的に黑色土を含んでいた。床面は平坦で北壁側及び東壁側でやや浅くなっていた。やや堅い。壁高はやや深い南西壁下で27cmと全般に浅い。

カマドは北側壁の東端を奥へ73cm掘り込んでつくられており、底は床面よりやや浅く、方形状を呈する。又、全容は不明であるが、暗褐色土と灰色粘土で構築されていた様である。ピットは2ヶ



第126図 第1号住居跡

所程確認されているが、いずれも浅い。又、カマド前の床面は10cm内外周囲より深く、皿状を呈していた。遺物は主としてカマド内とa区覆土中から須恵器坏2点、土師器壺3個体と破片及び土製支柱が出土している。なお、図示しなかったが、他に須恵器坏の底部破片で回転糸切り後外周回転ヘラケズリを施すものが1点ある。

第1号住居跡出土遺物（第127図）

土師器壺（第127図3）

口径21.9cm 底径5.5cm 脇部最大径22.2cm 器高30.5cm。胴上半部に最大径を持ち、肩部にケズリによる段をやや持つて頸部は緩く括れて立ち気味となり、口縁は外傾気味に開く。胴下半部は緩やかに収縮し小さい底部へ続く。肩部は横から斜めヘラケズリ、胴下半部タテヘラケズリを施し、口縁部内外面に横ナデ、胴部内部横方向ヘラナデ調整。底部から1/6上部に接合痕を強く残す。胎土細砂粒、角閃石・白色砂粒の微粒子・径1ミリ前後の酸化鉄分粒子を含む。色調にぶい赤褐色。焼成良。口縁部20%胴～底部40%残存（カマド内）

土師器壺（第127図4）

口径22cm、脇部最大径21.5cm、残高22.5cm、胴上半部が膨らみ、形状は1の壺に似るが、頸部は内傾し、括れて口縁部は外傾気味に開き、端部はやや立ち気味となる。ヘラケズリ、横ナデは1と同じ手法。成形時と思われるゆがみがやや強い。

口縁部に巻き上げ痕、胴部に接合痕を残す。胎土は1と同じ。色調淡赤褐色。口縁部70%・胴部50%残存。（カマド内）

土師器壺（第127図5）

脇部径23.2cm 底径6.1cm 残高19cm。全形はわからないが、1・2の壺とはほぼ同形と思われる。脇部は斜ヘタテヘラケズリ、底部ヘラケズリ、内面ヘラナデ。胴部に接合痕を残す。胎土は1と同じ。色調赤褐色、底部付近内外面二次加熱により淡褐色を呈する。器壁は薄い。胴部30%、底部100%残存。（カマド内）

土師器壺は他に床面直上から脇部破片1点、底部破片2点が出土している。

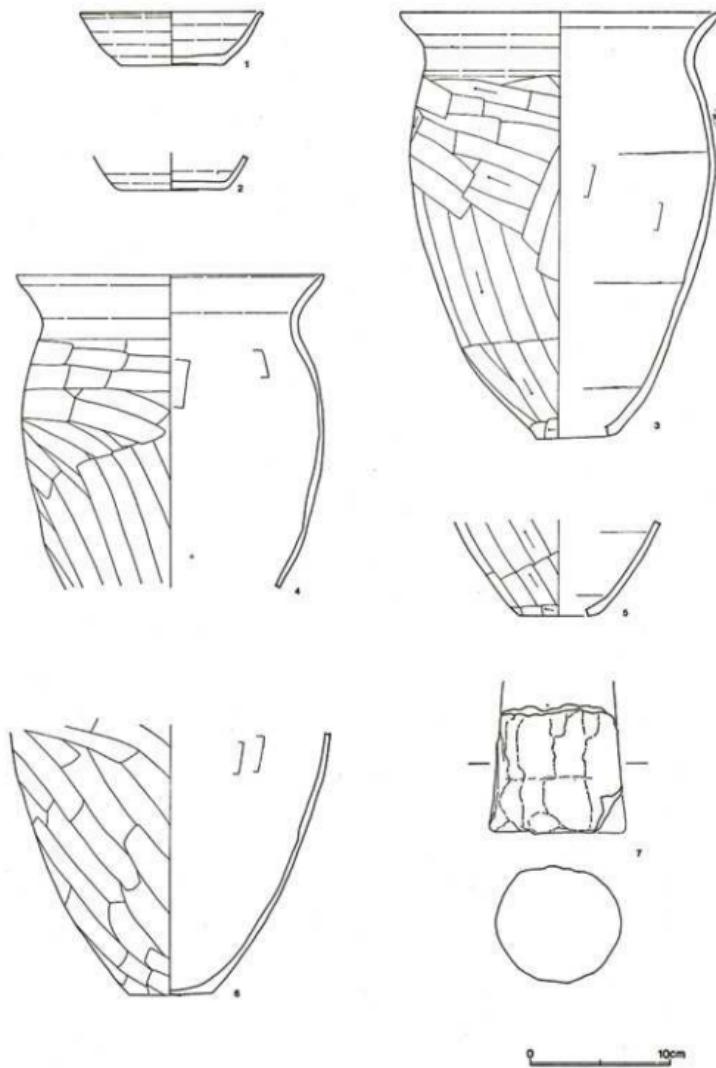
須恵器坏（第127図1）

口径12.9cm 底径7.3cm 器高3.9cm。やや大き目の上げ底状を呈する底部から、内湾気味に開き、底・体部の境目内面には爪先手法に準ずると思われる凹線があり、口縁端部をつまみ出している。成形は巻き上げ後水換き成形、底部は回転糸切り後ほぼ全面を回転ヘラケズリを施す。ロクロの方向は右まわり。全面に丁寧な回転ナデを施していくねいなつくりである。胎土細砂粒、非常に緻密、径2ミリ程の鉄分粒子を含む。白色針状物質を含む。色調淡灰色。口縁部17%、底部60%残存。

須恵器坏（第127図2）

底径8.1cm底部は平ら。口縁部は内稜を持って内湾は弱く直線状に立上がる。底部回転糸切り後回転ヘラケズリを施す。ロクロは右まわり。内外面に横ナデ痕を残す。ていねいなつくり。胎土細砂粒。径1～2ミリの石英破片を含む。白色針状物質を多量に含む。色調灰白色底部50%残存。

土師器壺（第127図6）



第127図 第1号住居跡出土遺物実測図

底部付近の破片である。外面はタテ方向にヘラケズリを行ない、更に底部はヨコ方向のヘラケズリを施し、内面は丁寧にヨコ方向にナデを施し、巻き上げ痕が回みとなって残る。器厚は薄い。色調橙色。

土製支柱（第127図7）

手捏ね。残高9.2cm、下幅9.9cm、色調橙色、胎土細砂粒、火焼により崩れやすい。

（2）台遺跡第1号溝（第128・129図）

A・B-13区にあり、2・3号溝に切られている。方向は西側でN-67°-Eであるが、東側でやや北寄りに曲がってN-39°-Eを向く。

断面形状は薬研に近いU字状を呈し、底は平坦で立上がり、上方でやや開く。

覆土は粘土質の黒褐色土・暗褐色土・褐色土が互層となっており、徐々に埋没していったものと思われる。幅は上面で1.9~2.4m、底面で0.5~0.9mで、深さは確認面から1.2m程で、西側で10cm程深くなっている。遺物は土師器の細片で、覆土中からであり、図示できるものはない。

（3）台遺跡第2号溝（第128・129図）

A-12、B-12・13区にあり、第1号溝を切っている。第4号溝とも切合っている様であるが、調査区域外の為不明である。

方向はN-10°-Wで、第3号溝とほぼ平行であり、直線的に延びる。

幅は上部で1.2m、底で0.3m、深さは中央部で0.95mで、断面は緩やかなV字状を呈する。又、北寄りのA-12区付近では東側の立上がり部分にテラス状に段があり、数回掘り直されているものと思われる。覆土は粘土質の黒褐色土・褐色土・暗褐色土がレンズ状に堆積しており、徐々に埋没していった状況を示している。

遺物は馬の歯がやまとまって第Ⅲ層下部付近から出土している。

（4）台遺跡第3号溝（第128・129図）

A-12・13・14、B-14区にあり、第1号溝を切っている。

方向はN-6°-Wでほぼ直線状で、北側でやや西寄りに方向を変え、N-9°-Wとなる。

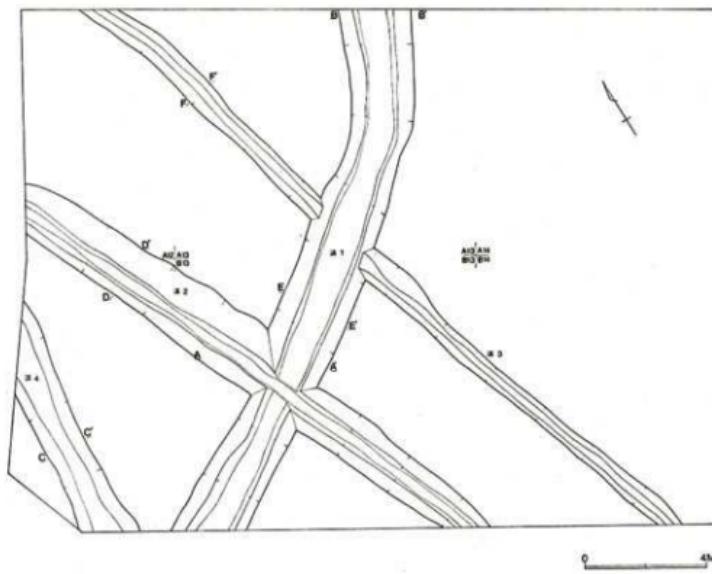
幅は上部で50~95cm、底で20~26cmで、深さは40~45cmと全体に浅く、断面V字状を呈する。覆土は粘土質の暗褐色土が堆積していた。底のレベルは北側より南側の方が20cm程深い。出土遺物はない。

（5）台遺跡第4号溝（第128・129図）

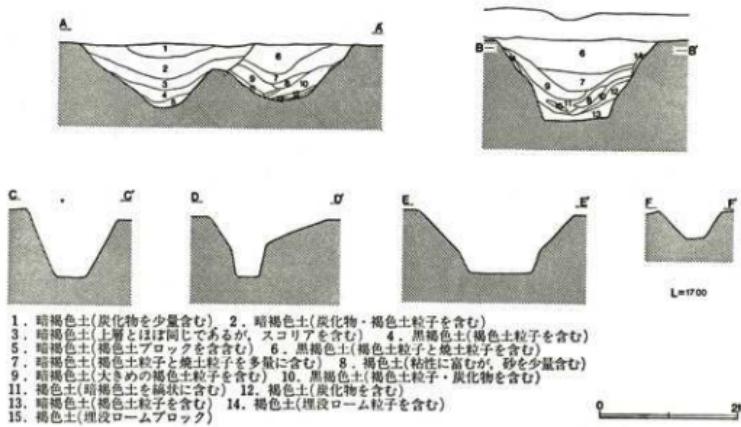
B-12区北隅にあり、一部分が調査をできたものある。

方向はN-18°-Eでほぼ直線状に延びる。幅は確認面で1.4~1.5m、底で0.5~0.9mで、深さは0.9mで薬研の形をとる。覆土は黒褐色土を主とする粘土質の土が堆積していた。

遺物は覆土上層から数点出土しており、縄文中期の石斧破片・土師器片、中世の土師質土器が6点出土している。



第128図 第1~4号溝



第129図 第1~4号溝土層断面図

第1・4号溝出土遺物実測図（第130図1～9）

甕（第130図1）

第1号溝出土の大形甕の頭部から肩部にかけての破片である。肩部の張りは大きく、大形の部類に入る。破片の全面に平行叩き、さらに肩部には花文と格子の複合文がほぼ等間隔で押印される。内面は横位の雜なナデが施される。輪積み痕は明瞭である。胎土は砂粒を多量含む。14世紀前半。常滑窯産。

土師器鉢（第130図2）

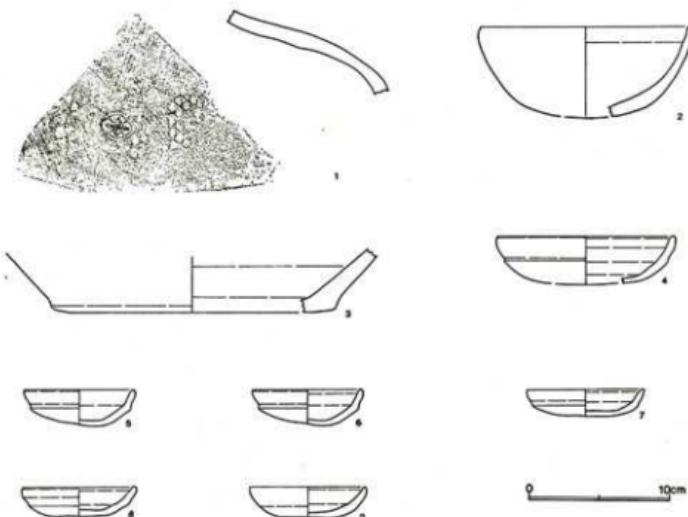
底部は丸底、器肉は厚く、内湾気味に立上がり、端部は丸く内湾し、内面は凹みが一周する。器内外面はヘラナデッケを施し、赤色塗彩する。胎土細砂粒、径1～3ミリの石英粒子・小礫を多く含む。口径14.9cm 器高6.5cm。 （大和 修）

擂鉢（第130図3）

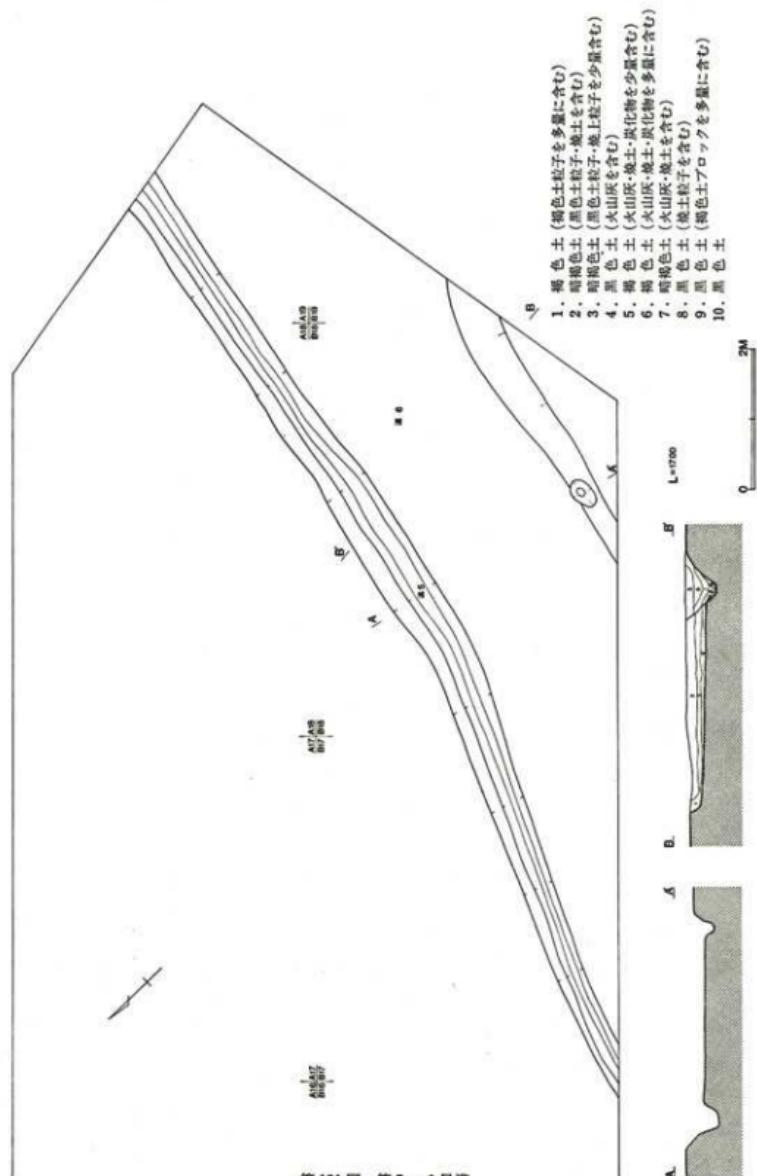
第4号溝出土の擂鉢の破片である。推定底径20.3cmであるが、破片の為、やや底径は小さくなると思われる。外面は粘土紐を積み上げ、ヘラで厚みを調整して整形されている。内面は横ナデが施される。使用痕は不明瞭である。胎土には砂粒を含む。色調は外面はにぶい赤褐色、内面は灰黄褐色である。常滑窯産。

土師質土器（第130図4～9）

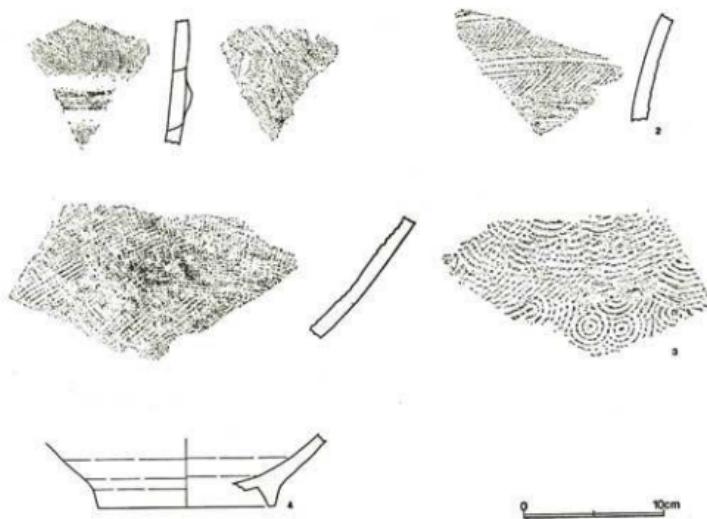
4は口径12.9cm、器高3.4cm。5は口径8.1cm、器高12.5cm。6は口径8.1cm、器高2.5cm。7は



第130図 第1・4号溝出土遺物実測図



第131図 第5・6号溝



第132図 第5号溝出土遺物実測図

口径8.4cm、器高1.9cm。8は口径8.4cm、器高2.1cm。9は口径8.4cm、器高2.2cmである。いずれも破片で口縁部との境にぶい稜をもつ。口縁部は若干内湾し、口唇は丸味をもつ。底部は平底に近い丸底である。内外面とも全面横ナデが施される。4は大形であるが他は小振りで定形化している。胎土には砂粒を含む。色調は外面ともぶい明褐色～灰褐色である。（星間 孝志）

(6) 台遺跡第5号溝（第131図）

A-18・19、B-17・18・19区にあり、第6号溝の北側縁辺沿いに、溝を切ってつくられている。方向は東から西へ向っており、東半部はN-81°-Wで、西半部はやや北寄りになってN-66°-Wとなる。幅は中央部上方で1.9m、底で0.3mの浅いV字形の薬研堀となり、立上がりはまっすぐ大きく開く。覆土は上層は褐色土を主とし、底付近では黒色土が、互層となって堆積していた。出土遺物なし。

(7) 台遺跡第6号溝（第131図）

A-18・19、B-17・18・19区にあり、第5号溝に切られている。方向はN-78°-Wで第5号溝とほぼ同一方向を向く。幅は中央部上端で7m程である。深さは南側で30cm、北側で60cmで緩やかに立上る。覆土は上層に褐色土・暗褐色土が、下層に白色の砂を含む黒色土が堆積していた。遺物は埴輪破片、平安時代初頭の土師器壺・須恵器壺の破片が出土しており、多くは第3～4層の覆土中から出土したものである。

第5号溝出土遺物（第132図）

円筒埴輪（第132図1）

凸帯を一部残す小破片である。全体にていねいなつくりで、外面は細かい縦刷毛整形、凸帯は低く、布等による横ナデ。内面は斜方向の刷毛整形。胎土中に径1ミリ前後の石英、酸化鉄を含む。焼成良好、色調橙色。

須恵器甕（第132図2・3）

2は大形の甕の口縁頭部の破片である。外面は中位を沈線で二段に分け、中に斜位のヘラ描き沈線を入れる。内面は横ナデ、胎土中に白色微粒子を多量に含み、焼成良好、色調濃青灰色。

3は甕の胴下半部の破片で、接合部の為か同心円文の叩き目は粗密が分かれれる。胎土中に白色微粒子と共に鉄分粒子（径2~4ミリ）を含む。色調灰白色、焼成良。
（大和修）

片口鉢（第132図4）

底部付近の破片で推定底径12.8cmを測るのみで器形全体は復元し得ない。底部からはほぼ直線的に立上がる。整形は粘土を輪積み後、ロクロによって器形の調整を行なっている。底部直上は約3cmにわたって横位のヘラ削りが全周する。内面はナデの痕跡が認められる。胎土には細砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は灰褐色である。常滑窯産。
（星間孝志）

第6号溝出土遺物（第133・134図）

土師器壺（第133図1）

口径12.8cm 器高3.5cm。扁平な底部から体部は内湾気味に開き、純く稜を持って、口縁部は短く立上がる。体・底部横ヘラケズリ、口縁部内外面横ナデ、内面ナデ整形を施す。胎土細砂粒、角閃石を多く含む。雲母微粒子を含む。焼成良、色調淡茶褐色、35%残存。

土師器小形甕（第133図2）

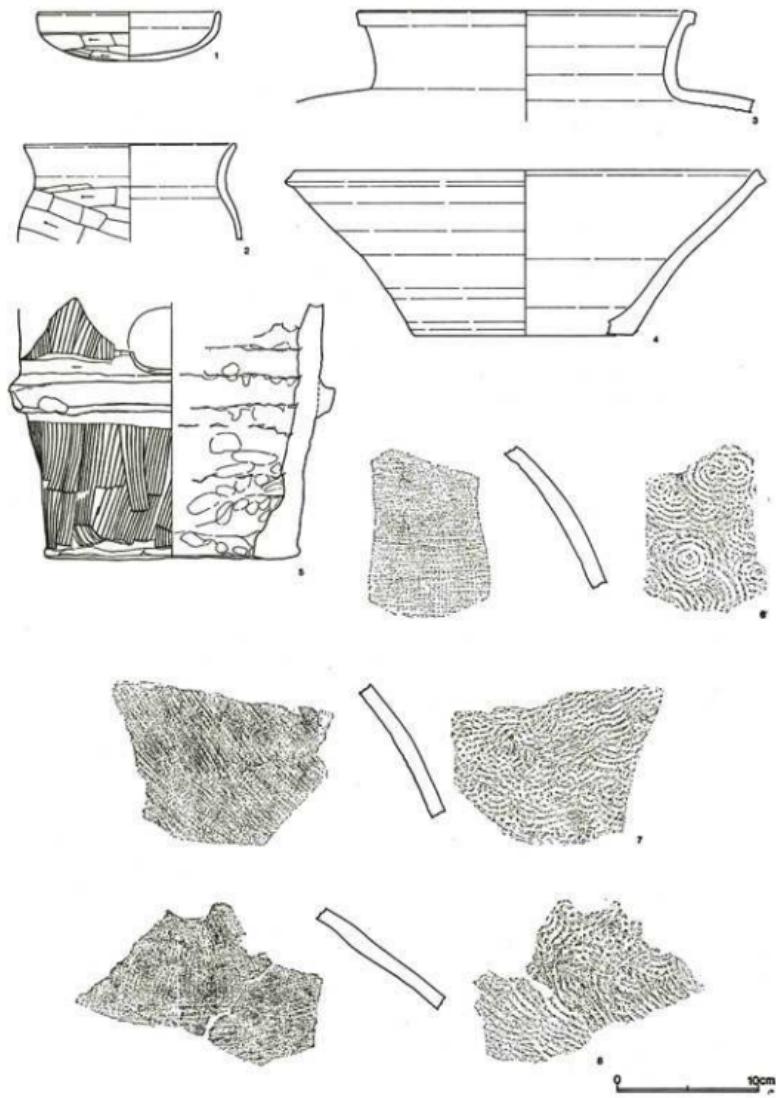
口径15.0cm 脊部径16.0cm。台付甕かとも思われる。胴上半部は丸味を持ち、頭部に横ヘラケズリによる段ができる。口縁部は緩やかに外反する。口縁部内外面横ナデ、肩部外面横ヘラケズリ、内面ヘラナデを施す。胎土細砂粒、石英、白色粒、雲母微粒子を多く含む。二次加熱によるとと思われ、器面荒れる。色調にぶい赤褐色、口縁～胴上半部20%残存。
（大和修）

擂鉢（第133図4）

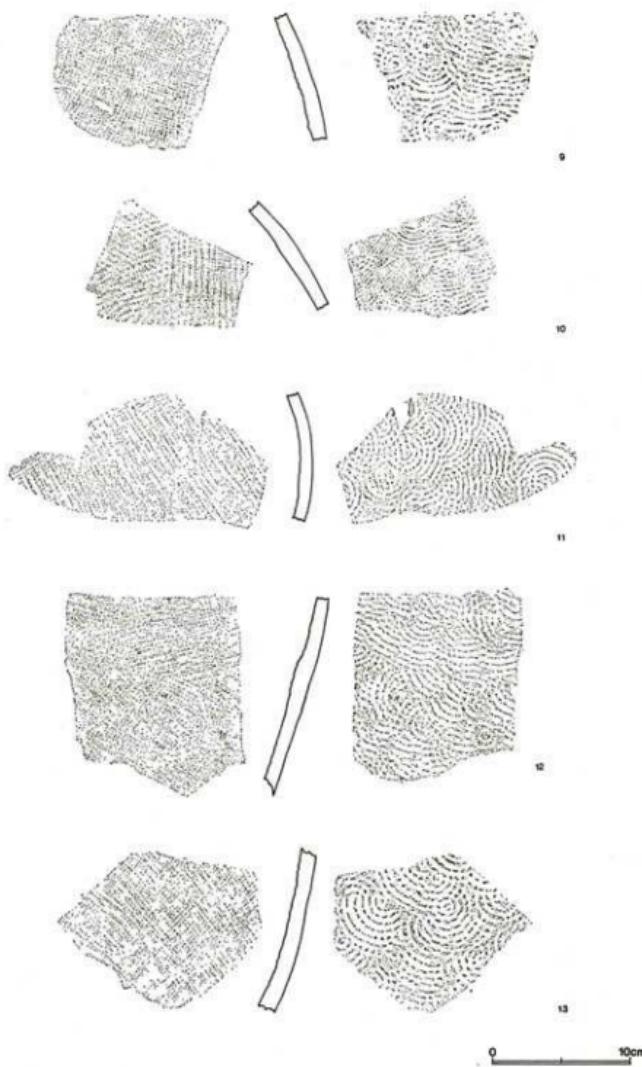
推定口径33.1cm、器高11.9cm。底部からは直線的に立上がり、胴部に括れを持ち、口縁部で大きく外反する。口唇は、太い沈線状の凹みをもち、全周する。整形は粘土紐の輪積み後、クシ状の工具で縦に施文され、口縁及び、底部直上はさらに横ナデが施される。内面はすべて横ナデされる。底部はヘラ削り。胎土は砂粒を含む。色調は外面はにぶい赤褐色～暗赤褐色、内面は暗赤褐色である。常滑窯産。
（星間孝志）

円筒埴輪（第133図5）

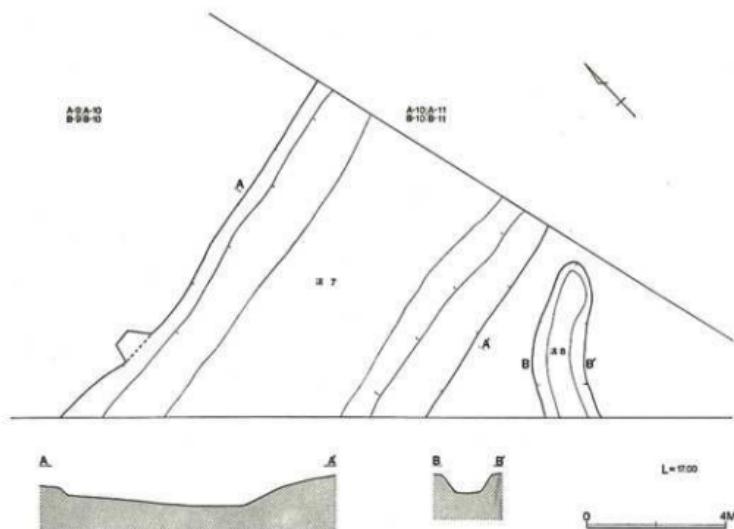
底径18.2cm、第一凸帯及び透孔の一部を残す基部破片である。つくりは全体にやや粗雑で器肉も厚い。透孔は第二段目に円孔を右回りにあけてナデしている。外面の調整は1.8cmあたり5本の縦刷毛整形後、断面台形の高い凸帯をはりつけ、上下に右回りの横ナデ。内面の調整は布等による粗い横ナデで基部付近は指ナデ。基部は分厚くなっている。胎土中に雲母・石英・礫を含む。色調浅黄



第133圖 第6號溝出土遺物實測圖（1）



第134図 第6号溝出土遺物実測図(2)



第135図 第7・8号溝

橙色。完存率基部30%。

須恵器甕（第133図3・第134図6～13）

3は口径20cm程の中形の甕の口縁部破片である。肩部は薄く平行叩き目文を残し、頸部は直立てや外反し、口端部は断面四角形状を呈し、内側に稜線をもつ。内面は同心円文。胎土中に細粒の石英を多く含む。色調は濃青灰色。

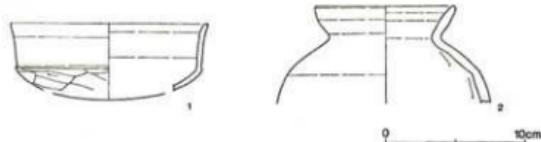
6～8・12・13は大形の甕の腹部破片で同一個体なるものと思われるが接合しない。外面は平行叩き目文を施し、内面に同心円文が残る。胎土中に白色微粒子を含み、焼成は良好、色調は濃青灰色で4・8は外面赤褐色を呈する。

9は中形の甕の肩部破片で内外面共、細かく叩き目が残っている。胎土も白色微粒子を含み、精選されている。10もやや大形の甕破片で外面の叩き目は細かい。白色微粒子を多く含み灰色を呈する。焼成良。

10は中形甕の肩部破片で内外の叩き目は粗く、凹凸が激しい。胎土中の砂粒は少なく、粉っぽい。色調は2に近く灰白色。焼成良。

（8）第7号溝（第135図）

B-10・11区にあり、すぐ南側に第8号溝がある。方向はN-78°-E。幅は中央部上端で7.6m、底で5.2mで、非常に緩やかに立上る。覆土は暗褐色土を主体とした土が堆積していた。遺物は覆土下部から土師器壺・甕破片が出土している。



第136図 第7号溝出土遺物実測図

(9) 第8号溝（第135図）

B-11区にあり、東側で消滅する。方向はN-42°-EからN-60°-Eを向き、東向きに曲がっている。幅は中央部上端で1.5m、底で0.7mで、深さは中央部で53cm程である。覆土は暗褐色土を主体とするものであった。出土遺物なし。

第7号溝出土遺物（第136図）

土師器壺（第136図1）

口径14.2cm、残高4.9cm。丸味をもつ底部から強く稜を持って口縁部は直立し、端部はやや外反する。端面はやや内傾する。底部横ヘラケズリ、口縁部内外面横ナデ、胎土細砂粒、角閃石、白色微粒子、鉄分粒子を含む。色調赤褐色、口縁部17%残存。

土師器壺（第136図）

口径10cm、胸部径10.5cm、残存高7.0cm。胴上半部の破片である。肩部は丸く、頸部で緩く括れて、外反し、口縁は短かく、端部はやや丸味を持つ。外面は丁寧なナデ、頸部以下の内面は凹凸が激しく、随所に指ナデ痕を残し、接合痕が残る。色調にぶい赤褐色、胎土細砂粒。なお図示しなかつたが、この壺の底部と思われる破片が出土している。残存率55%。

その他の出土遺物（第137図）

(1)縄文土器（第137図1～4）

いずれも掘り之内式土器の小破片である。1～3は同一個体と思われ、二条単節LRの縄文を施しておらず、口縁部は内傾し、外面に一条の沈線が一周する。

4は細い斜線を施し、下を横線で区切っている。

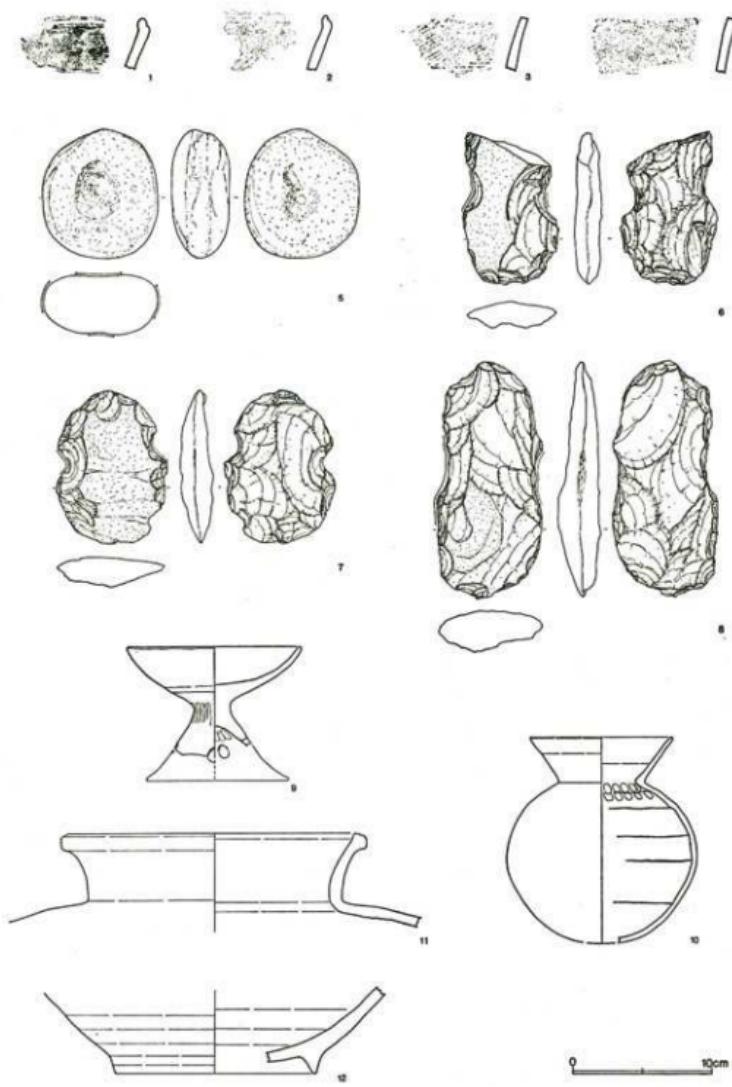
(2)石器（第137図5～8）

いずれも上述の土器とほぼ同時期に属するものであろう。

5はくぼみ石で長さ9.4cm、幅8.3cm、厚さ4.3cm、重量486g、両面中央部に浅い凹みがあり、ややざらついている。周辺部は磨った跡が部分的にあり、側面は全面に中央部の凹みと同様な敲打によると思われる痕跡が一周する。石質：輝石安山岩。

6は打製石斧で残存長11.2cm、幅6.9cm、厚さ1.7cm。片面の半分に自然面を残し、左右から大きく剝離した後、下半部の刃部に細調整を施している。両側縁は若干磨滅している。石質：硬質頁岩。

7も打製石斧で長さ11.1cm、幅7.8cm、厚さ2.2cm、重量194g。片面は自然面を大部分残し、そのカーブを利用している。調整は両側縁の抉り込みと下半部の刃部へのものに限られる。もう一方



第137図 その他の出土遺物

は左右からの大きな剝離の後、下半部と両側縁に細かい調整がなされている。石質：硬質頁岩。

8も打製石斧で長さ17.1cm、幅7.5cm、厚さ2.9cm、重量42.4g。両側縁から大きく剝離し、下半部を上半部よりもやや広く刃部を作出しており、下半部の細調整は入念である。石質によるものか両側縁の磨耗は広い範囲にわたる。石質：絹雲母片岩。

土師器高坏（第137図9）

坏部径12.5cm 残高8.0cm。坏部は浅くやや段をもって内湾気味に開く。脚部は接合部から大きくラッパ状に開く。脚部はややずれる四方向に径1.2cm程の孔が焼成前にあけられている。器面は磨滅しているが、ヘラナデツケを施し、外面全体に赤色塗彩を施している。胎土細砂粒、径1~3ミリの石英碎片を含む。焼成良、裾部を欠く。

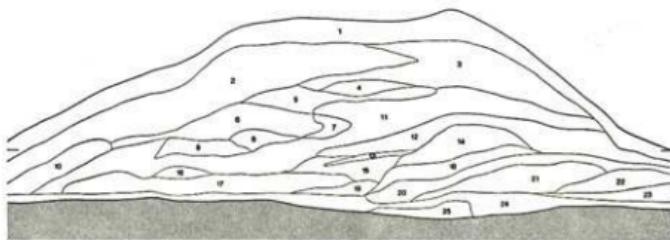
土師器小形壺（第137図10）

口径10.2cm 脚部径13.8cm 器高15cm。胴部は球形で中位に最大径を持ち、口縁は直線状に短かく外反する。表面は剥落して整形は不明であるが、口縁部横ナデ、胴部ヘラナデツケを施す様である。胴部上半に二段の輪積痕、頭部に接合痕と指おさえ痕を残す。胎土細砂粒、径1ミリ前後の石英細片を多く含む。焼成良、色調赤褐色。

須恵器壺（第137図11）

口径20~22cm程の中形の壺の口縁部破片である。肩部は薄く平行叩き目文を残し、頸部は直立してやや外反し、口端部は断面四角形状を呈し、内側に稜線をもつ。内面は同心円文。胎土中に細粒の石英を多く含む。色調は灰色。

（大和 修）



- 1. 表土
- 2. 黒色土(灰色粘土及び褐色土ブロックを含む)
- 3. 褐色土(黑色土ブロックを含む)
- 4. 褐色土(黑色土・灰色粘土の互層)
- 5. 棕褐色土(黑色土ブロックを若干含む)
- 6. 褐色土(上層より明るい)
- 7. 褐色土(黑色土粒子・灰色粘土を含む)
- 8. 暗褐色土(黑色土粒子を含む)
- 9. 褐色土(黑色土粒子・灰色粘土を若干含む)
- 10. 黑褐色土(褐色土粘土・灰色粘土を少し含む)
- 11. 暗褐色土(黑色土粒子・灰色粘土を含む)
- 12. 黑褐色土(灰色粘土を含む)
- 13. 黑色土
- 14. 褐色土(灰色粘土粒子を含む)
- 15. 暗褐色土(黑色土粒子を含む)
- 16. 褐色土(灰色粘土粒子を含む)
- 17. 褐色土(黑色土ブロックを含む)
- 18. 灰色粘土(黑色土・褐色土ブロックを含む)
- 19. 褐色土(黑色土粒子・灰色粘土を含む)
- 20. 青灰褐色土(青灰色粘土を多く含む)
- 21. 褐色土(青灰色粘土を少量含む)
- 22. 晴褐色土(黑色土粒子を含む)
- 23. 黑色粘土層
- 24. 青灰色粘土
- 25. 灰褐色粘土

0 1 2 3 4

第138図 石田堤土層断面図

片口鉢（第137図12） 推定底径14.6cmの片口鉢の底部付近の破片である。5号溝出土の鉢と同形態である。底部からは内湾気味に立ち上がり胴部へ移行する。高台は貼り付である。整形は粘土組を輪積みし、ロクロによって器形の調整を行い、直上を2~3cmの横位ヘラ削りを全周施す。内面は横ナデされる。内面には使用痕を留め、底部には砂粒の付着が顕著に認められる。胎土は砂粒の他、白色鉱物粒が含まれる。色調は内外面とも淡青灰色を呈し、焼成は良好である。常滑窯産。

（星間 孝志）

（10）石田堤（第138図）

発掘区の北側には石田堤と呼ばれる土堤があった。この石田堤は、天正18年に石田三成が、当遺跡の北方約3.8kmの所に位置する忍城攻めの時に築いたものといわれているが、現在は、行田市埼玉と、この台遺跡近辺にわずかに残っているだけであったが、本遺跡調査の直前に土取りによって路線内の堤は失われてしまった。しかしながら土堤の断面が見られた為に土層断面図を取ったものである。土盛りの方法としては、旧地表面になんら整形を行わず、そのまま使用し土盛りを行ったことがわかる。

（大和 修）

VI 結語

吹上町台遺跡は、埋没ローム層上に立地し、中世以降に属すると思われる溝8本と平安時代の堅穴住居跡1軒からなる遺跡であった。遺跡の西方100m程の所では昭和55年7月に吹上町教育委員会により調査が行なわれ、袋・台遺跡として報告されている(註1)。その概要は弥生時代中期宮ノ台期の堅穴住居跡、弥生末～古墳時代初頭の方形周溝墓、和泉期の堅穴住居跡、鬼高期の古墳址等が検出されている。今回の調査時にも溝の覆土中等から概期の遺物が出土しており、遺跡周辺に方形周溝墓、古墳址等が存在するであろうことを示している。更にこの南200mの地点は昭和37年に調査が行われ、古墳時代五領～鬼高Ⅰ期にかけての遺物が出土している(註2)。

これまでの調査の中で、住居跡として確認された遺構は、弥生時代中期1軒、古墳時代和泉期1軒、鬼高期1軒、国分期1軒と少なく、概期を除いて、弥生時代後期～古墳時代にかけて、遺跡周辺はやや低い部分の第6号溝以南と第7号溝以北には黒褐色土が厚く堆積していた事からも、低湿地が広がり、基壇として機能していた事が伺われる。今回の調査時に於ても、その他の遺物として図示した第137図の9・10の土師器壺・小形壺は第7号溝の北側の窪地とした地点から出土しており、確認はできなかったが、或は土壙墓等の存在した可能性もある。これらは第130図2の壺と共に、五領Ⅰ期の所産であろう。

次に出土遺物についてであるが、第7号溝の覆土中からは土師器壺と小形壺各1点が破片で出土している。壺は稜をもって垂直に近く立上がり、口縁端部に平坦面をもつ事から、鬼高Ⅰ期のやや新しい段階のものであろう。

第5・6号溝からは様々な時期の遺物が出土しているが、叩き目をもつ須恵器壺破片と共に円筒埴輪破片2点が出土している。第132図1は突帯部分の小破片で、突帯は低く、或いは袋・台1号墳のものと同一時期とできるかも知れない。第133図5はやや大きい破片で、突帯もしっかりした断面台形を呈しており、径がやや大きい等、やや古い特徴を備えるものである。

第1・5・6号溝からは、鎌倉時代から室町時代にかけての壺、鉢、擂鉢等が出土している。いずれも常滑産とされたもので、溝の覆土中から出土しており、溝の年代の上限が決められる。特に第1号溝から出土した第130図1の壺肩部破片は押印文様がつけられており、これは知多半島の古窯から出土する壺の押印文様に非常に良く似ており、このような押印文様は行基焼第Ⅱ型式の壺についているもので、時期は鎌倉時代後期から室町時代初頭とされている(註3)。又、大形片口鉢破片は、第1・5号溝とグリッド中から出土しており、5号溝・グリッドのものはやや古く年代的に1号溝の鉢より漸るものである。そして第133図4の第6号溝のものは擂鉢となるものでかなり時代の降るものであろう。

次に、第1号住居跡出土遺物について若干触れてみたい。遺物は須恵器壺1点、同底部破片1点、土師器壺2点、胴下半部1点、同底部破片1点、土製支柱1点で、他に図示しなかったが回転糸切り後、外周に回転ヘラケズリ調整を施す底部のみの須恵器壺破片が出土している。遺物は主にカマド周辺部から出土したもので、一応一括遺物として良いと思われる。これらの他に第6号溝出土遺物中の土師器壺・小形壺があるが、これは1住の遺物と同時期として良いものであろう。

まず須恵器坏であるが、これは一見して南北企窓跡群の產であることが分る、白色針状物質を多く含むものである。7~8世紀代の北武藏の須恵器については、宮都・陶邑等との比較検討により、論考が行われている(注4)。また、8~9世紀の須恵器についても、窓跡毎に編年されて来ており(注5)、多少の年代感の相違はあるものの、大まかな流れとしては異なるものと思われる。

第1号住居跡出土の唯一の全形を知り得る第127図1の坏は、口径13.0cm、若干上げ底状の底部から屈曲して立上がり、体部でやや張り、口縁端部で軽く外反するもので、底部はほぼ全面を回転ヘラケズリを施し、糸切痕を殆んど残さないものである。北武藏の8世紀代初頭とされる山下6号窓跡階の坏は口径15.5~17.5cmと大径で、前内出2号窓跡階で13~14.5cmのものが多くなり、前内出1号窓跡階で12~13cm代の坏が多くなる。次の将軍沢地区第2支群B-2号窓跡階で口径13cmを越える坏は少なくなる。また、口縁部形態は前内出1号窓までは直線的なものであったが、当段階で体部が丸く張り出し、口縁端部が外反し始める。形態・法量から見ると、1住No1土器はこの将軍沢地区第2支群B-2号窓跡階と思われる。底部調整に関しては、将軍沢段階では回転糸切り後、回転ヘラケズリを施すものと糸切りのままのものがある。本遺跡1住の坏は糸切りのままのものはないが、底部中央に糸切り痕の残るものとほとんど残らないものがある。次の段階の八坂前4号窓跡階では、底部糸切りのままの坏だけへと変わる時期と考えられる。また、No2の坏は底部から直線的に立上る体部が見られる事からより古い要素を持つと言えよう。

次に、第127図3~6の土師器臺である。これらはいずれも同3、4と同様の器形を持つと思われ、最大径を口縁部に持つものの、肩部はかなり張り、肩部ヨコヘラケズリの窓が殆どを占め、鬼高时期以来続いて来たタテヘラケズリの窓はきわめて少なくなる様である。又、頸部から口縁部へかけて緩やかに外反するのも概期の特徴であろう。大宮台地周辺では類例が少なくやや遠い地域のものとなってしまうがほぼ同時期のものとして、児玉町雷電下遺跡4号住、一段階遡る例として朝霞市第二西久保遺跡1号住例が挙げられるが、これは臺はほぼ同時期と思われるが、坏はやや古い様相が見られる。やや降る例として、坂戸市花影2号住例が挙げられるかと思われる。加須市水深遺跡では良好なセットがないが、12号住例は一応、同時期にできるかと思われる。水深遺跡例で一段階新しい形の窓をさがすとすれば、5号住例であろう。さて、こうして見ると、台遺跡1号住は坏がやや新しく、窓はやや古い様であるが、これは8世紀末~9世紀初頭の中で納まるものであろう。類例の増加を待って更に検討を加えて行きたいと思う。

(大和 修)

註

1. 高橋俊男・田部井功ほか(1982)『袋・合造跡』吹上町教育委員会
2. 早川智明(1962)「吹上町袋遺跡発掘調査小報」埼玉研究第6号
3. 「半田市内の知多窓—1969—」半田市誌編さん委員会所収の押印文拓本に酷似する。
4. 金子真土(1982)「北武藏の須恵器」埼玉県立歴史資料館 研究紀要第4号
5. 神奈川考古第14号(1983)『奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古同人会

引用・参考文献

広島六郎太ほか(1973)『第二西久保遺跡発掘報告』朝霞市教育委員会

栗原文藏ほか(1972)『水深』埼玉県遺跡調査会

今泉泰之ほか(1974)『南大坂・中組・上組・鶴ヶ丘・花影』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第3集

駒宮史朗ほか(1979)『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第22集

小川良祐ほか(1974)『前内出窓址発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会

VII 付 篇

三ヶ尻林遺跡出土土器に関する X線回折分析・電子顕微鏡観察

1. 実験

1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、φ10mmの試料台にヒルバーベースで固定し、イオンスピッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の固定はX線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅体陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧—電流；30KV—15mA、スリット系；1°—0.5mm—1°の条件でおこなった。

走時速度は2°/min、フルスケールは800カウントとした。なお、胎土の分析に先だって原土と思われるローム質粘土の分析をおこなった。X線回折試験は原土、電気炉において、700°C、900°Cで各々1時間焼成した試料(同一試料を石英ガラスに定着し、原土、700°C、900°Cと順次実験をおこなう。)を3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析をおこなった。ただ900°C以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によっておこなった。

観察には日本電子製を用い、倍率は×45、300、700、1,500、4,500の5段階でおこない、写真撮影をした。

45~300倍は胎土の組織、700~4,500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2. 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類をおこなった結果を示している。X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中にあらわれる各鉱物特有のピークの高さ(強度)をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大略 $2\theta = 10^\circ \sim 20^\circ$ の範囲にあってチャート全体に膨れあがるブロードな現象を示す

試料 No.	タブ タイプ 類	焼ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)									備考	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl	Cr(Mu)	
Mi-1	E	IV	⑫	⑩	3	2			4	2	5	96	25		
2	D	IV	⑪	⑨	3							114	11		
3	E	IV	⑫	⑩	3		2					63	8		
4	G	IV	⑭	⑩					(4)			140	7		
5	E	IV	⑯	⑩	2						3	134	30		
6	E	IV	⑫	⑩	2		2					148	12		
7	E	IV	⑫	⑩	3		3					131	14		
8	A	IV	①	⑤	3	2	2		3	2		71	13		
9	E	IV	⑫	⑩	3		2					51	5		
10	A	IV	①	⑤	4	2	2		3		2	145	18		
11	D	IV	⑪	⑧	3						6	143	37		
12	D	IV	⑩	⑦	3							99	11		
13	D	IV	⑪	⑦	3							97	11		
14	B	IV	①	⑤	3	3	2					108	13		
15	D	IV	⑩	⑧	4							111	22		
16	D	IV	⑪	⑧	2						3	103	16		
17	D	IV	⑩	⑦	3						3	85	8		
18	C	IV	⑨	⑦	2		2				2	139	13		
19	A	IV	①	⑤	5	2	6					122	20		
20	D	IV	⑩	⑧	3							125	24		
21	E	IV	⑫	⑩	7		3			2	3	54	31		
22	F	IV	⑩	⑧	2		3					125	18		
23	D	IV	⑩	⑧	4							162	58		
24	E	IV	⑫	⑩	3		3				4	128	11		
25	D	IV	⑩	⑧	4						3	82	9		
26	A	IV	①	⑤	2	2	2				3	115	65		
原 土 観音山1	E		⑫	⑩	4		3					40			
2	D		⑩	⑧	5							18	50		
3	D		⑯	⑩	3							27	40		

焼成ランク Mu...I Mu-Cr...II Cr-glass...III glass...IV 原土...V
 Mo...モンモリロナイト Mi...雲母類 Hb...角閃石 Ch...緑泥石 Ka...カオリナイト Ha...ハロイサイト Au...普通輝石
 Hy...紫蘇輝石 Qt...石英 Pl...斜長石 Cr...クリストバライト Mu...ムライト
 Mo-Mi-Hb...三角ダイアグラム Moch...Mi-Hb...菱形ダイアグラム

組成分類

部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量とX線回折試験におけるガラス量を比較対比し、さらにムライト(Mu)、クリストバーライト(Cr)などの組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

i) Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム

第1図に示すように三角ダイヤグラムを①～⑩に分割し、位置分類を各胎土についておこない、各胎土の位置を数字であらわした。

Mo、Mi、Hb の3成分の含まれない胎土は記載不能として⑪に含め、別に検討した。

三角ダイヤグラムはモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を百分率(%)で表示する。

モンモリロナイト(Mo)は $Mo/Mo+Mi+Hb \times 100$ で百分率として求め、同様に Mi、Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④は、Mo、Mi、Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることをあらわしている。

位置分類についての基本原則は第1図に示すとおりである。

ii) Mo-Ch、Mi-Hb 菱型ダイヤグラム

第2図に示すように菱型ダイヤグラムを①～⑩に分割し、位置分類を数字であらわした。記載不能は⑪として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)のうち、③成分以上含まれない、⑤ Mo、Ch 2成分が含まれない、⑥ Mi、Hb の2成分が含まれないの3例がある。

菱型ダイヤグラムは Mo-Ch、Mi-Hb の組合せを表示するものである。

Mo-Ch、Mi-Hb の各次のX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎に百分率であらわすもので、例えば、 $Mo/Mo+Ch \times 100$ と計算し、各組合せ百分率を記載したものである。

菱型ダイヤグラム内にある①～⑦はMo、Mi、Ch、Hbの4成分が含まれ、各辺はMo、Mi、Ch、Hb のうち3成分、各頂点は2成分が含まれていることを示す。①-1と①-2は現在のところ大きな意味はないが胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要となるかもしれないが現在は①として一括に取り扱った。

位置分類についての基本原則は第2図に示すとおりである。

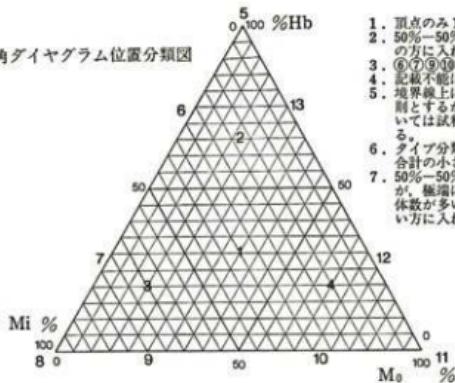
2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と電子顕微鏡観察によるガラス量によっておこなった。

ムライト(Mu)は磁器など高温で焼かれた状態ではじめて生成する鉱物であり、クリストバーライト(Cr)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

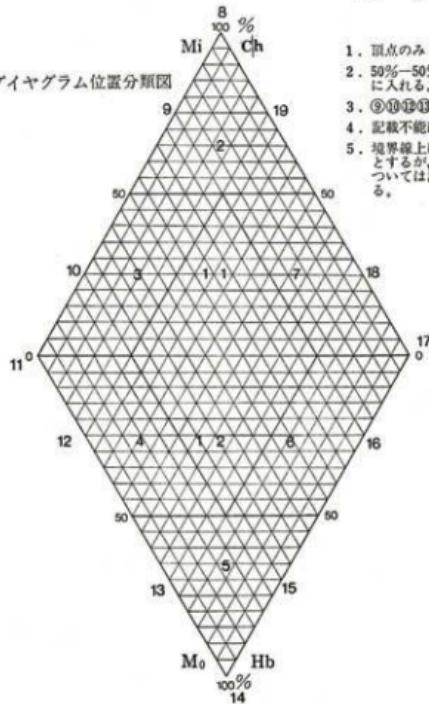
これらの事実に基づきX線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

第1図三角ダイヤグラム位置分類図



1. 頂点のみ1点。
2. 50%—50%の場合は若い数字の方に入れる。
3. ⑥⑦⑨⑩⑪⑬は外周のみ。
4. 記載不能は⑭
5. 境界線上にある場合は2を原則とするが、①②③④⑤⑥⑦については試料点の多い方に入れる。
6. タイプ分類は各座標の番号の合計の小さいものから分類。
7. 50%—50%は2を原則とするが、極端に数字の高い方に個体数が多い場合は個体数の多い方に入れる。

第2図菱形ダイヤグラム位置分類図



1. 頂点のみ1点とする。
2. 50%—50%など境界は若い数字に入る。
3. ⑨⑩⑪⑫⑯⑭⑮⑯は外周のみ。
4. 記載不能は⑭
5. 境界線上にある場合は2を原則とするが、①②③④⑤⑥⑦については試料点の多い方に入れる。

- ④ 焼成ランク I …高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。
- ⑤ 焼成ランク II …ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスの単位面積が狭くなる。
- ⑥ 焼成ランク III …ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面をなし、ガラスのつながりにかける。
- ⑦ 焼成ランク IV …ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。
- ⑧ 焼成ランク V …原土に近い組織を有し、ガラスがほとんどできていない。

以上の I ~ V の分類は原則であるが胎土の材質すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス類も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せと、いくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第 1 表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱型ダイヤグラムの位置分類による組合せによっておこなった。

同じ組成をもつ土器胎土は位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜はアルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。例えば三角ダイヤグラムの①、菱型ダイヤグラムの①-1 の組合せは A、三角ダイヤグラムの②、菱型ダイヤグラムの⑫は B という具合である。各文字の後の () 内の数字は三角、菱型ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。

近い組成を示しながら位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には試料数の多いものの類似として A' などとダッシュを付けて分類した。

なお、タイプ分類の A、B、C 等は便宜上であり、今後試験数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3. 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第 1 表胎土性状表に示すように、第 3 図三角ダイヤグラム、第 4 図菱型ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて A ~ G の 7 タイプに分類される。

三ヶ尻林遺跡における原土は採取できなかったが近隣の觀音山で採取した原土は第 3 図、第 4 図に示すように ⑪-⑯、⑪-⑯ の位置分類に該当し、前者は E タイプ、後者は D タイプの土器胎土に對比される。

土器胎土は D タイプ (10 個) が最も多く、E タイプ (8 個) がつづいており、原土との関係から推定して、在地性の可能性が最も高い。

三ヶ尻林遺跡の土器胎土の特徴は、植物纖維を混入していることであり、植物纖維はある方向性を有することである。

胎土は中～細粒の石英、斜長石を混入する碎屑性ローム質粘土（凝灰質粘土）であり、全体に均質で粒径のそろった粘土である。ガラスは微小で、土器の焼成ランクはⅣとひくい。

Aタイプ…Mi—8、10、19、26

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)の3成分よりなり、緑泥石(Ch)に欠ける。

細粒の石英、斜長石を混入する碎屑性ローム質粘土であり、植物繊維を混入する。ガラスは微小で、焼成ランクはⅣとひくい。

Bタイプ…Mi—14

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)の3成分よりなり、緑泥石(Ch)に欠ける。

Aタイプと同じ鉱物組合せである。比率が若干異なるために位置分類が相違するが土器胎土としては類似性が高い。

細粒の石英、斜長石を混入する碎屑性ローム質粘土で、植物繊維を混入する。ガラスは微小で、焼成ランクはⅣとひくい。

Cタイプ…Mi—18

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)の2成分を含み、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)に欠ける。

細粒の石英、斜長石を混入する碎屑性ローム質粘土で、植物繊維を混入する。ガラスは微小で、焼成ランクはⅣとひくい。

Dタイプ…Mi—2、11、12、13、15、16、17、20、23、25

モンモリロナイト(Mo)のみ含み、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の3成分に欠ける。

細粒の石英、斜長石を混入する碎屑性ローム質粘土で、植物繊維を混入する。ガラスは微小で、焼成ランクはⅣとひくい。

個体数は最も多く、観音山原土の2、3とも対比されることから、在地性と判断される。

Eタイプ…Mi—1、3、5、6、7、9、21、24

Fタイプ…Mi—22

モンモリロナイト(Mo)、角閃石(Hb)の2成分よりなり、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)に欠ける。

Fタイプは鉱物組合せでは同じであるが、比率が若干異なるために位置分類が相違する。土器胎土としてはタイプに類似する。

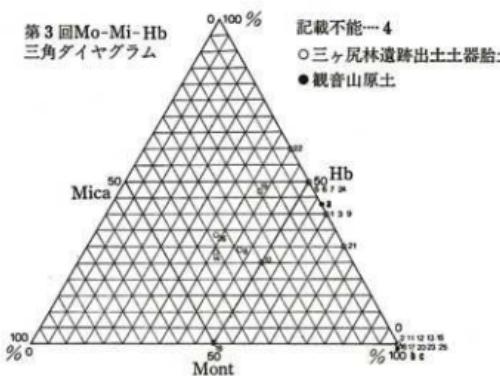
中粒の石英、斜長石を混入する碎屑性ローム質粘土で、植物繊維を混入する。

ガラスは微小で、焼成ランクはⅣとひくい。

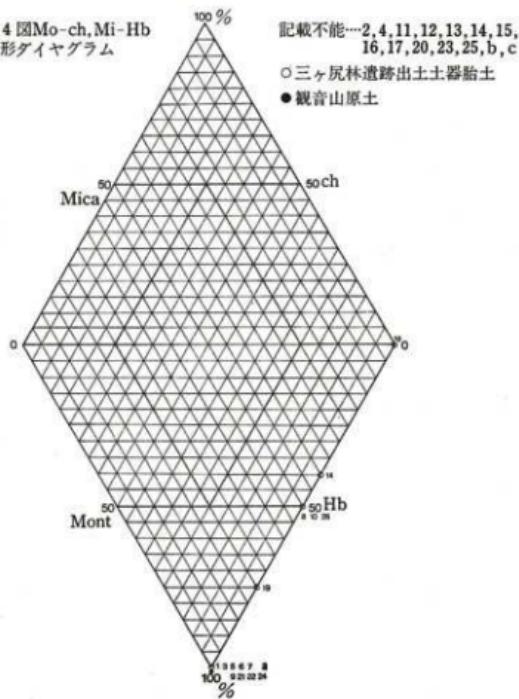
Gタイプ…Mi—4

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の成分に欠け

第3回Mo-Mi-Hb
三角ダイヤグラム



第4回Mo-ch,Mi-Hb
菱形ダイヤグラム



る。

胎土は主に火山ガラスと $n\text{Al}_2\text{O}_3$, $m\text{SiO}_2$, $l\text{H}_2\text{O}$ よりなり、植物繊維を混入する。

ガラスは微小で、焼成ランクはⅢとひくい。

3-2 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

第5図 Qt-Pl相関図はX線回折試験によって得られた石英 (Qt) と斜長石 (Pl) の強度高を単純にグラフ化したものである。

実験は、Full scale 800 Count に条件設定したものであり、この条件下におけるチャートとの強度高をミリメーター単位であらわしてある。石英、斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。砂における石英、斜長石の量比は、後背地の地質および運搬過程における流速など種々の条件によって変化し、ある地域においては、大まかにある一定の比率を有するものと推察される。ある地域におけるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各集団における技術上の問題である。例えば、同一集団において使用する粘土は若干異なっても砂の粘土に対する混合比は、ある一定の量化にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は燃料の相違、燃焼のさせ方などが異なっていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いいかえれば、植生によって異なったであろう。

粘土に対する砂の混合比は各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関を持ったであろうと推察される。すなわち、維持した土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土に対する砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

三ヶ尻林遺跡における Qt-Pl の相関は第5図に示すとおりである。

土器は大きくⅠ、Ⅱの2つのグループに分類される。

Ⅰグループ…Mi-3、8、9、17、25

石英 (Qt) は50~75、斜長石 (Pl) は5~15の範囲にある。

個体数は5個であるが、Ⅰグループのものとは明瞭に区分される。

Ⅱグループ…Mi-1、2、4、5、6、7、10、12、13、14、15、16、18、19、20、22、24

石英 (Qt) は95~150、斜長石 (Pl) は10~20の範囲にある。

個体数は19個と多く、集中度は高い。

その他…Mi-11、21、23、26

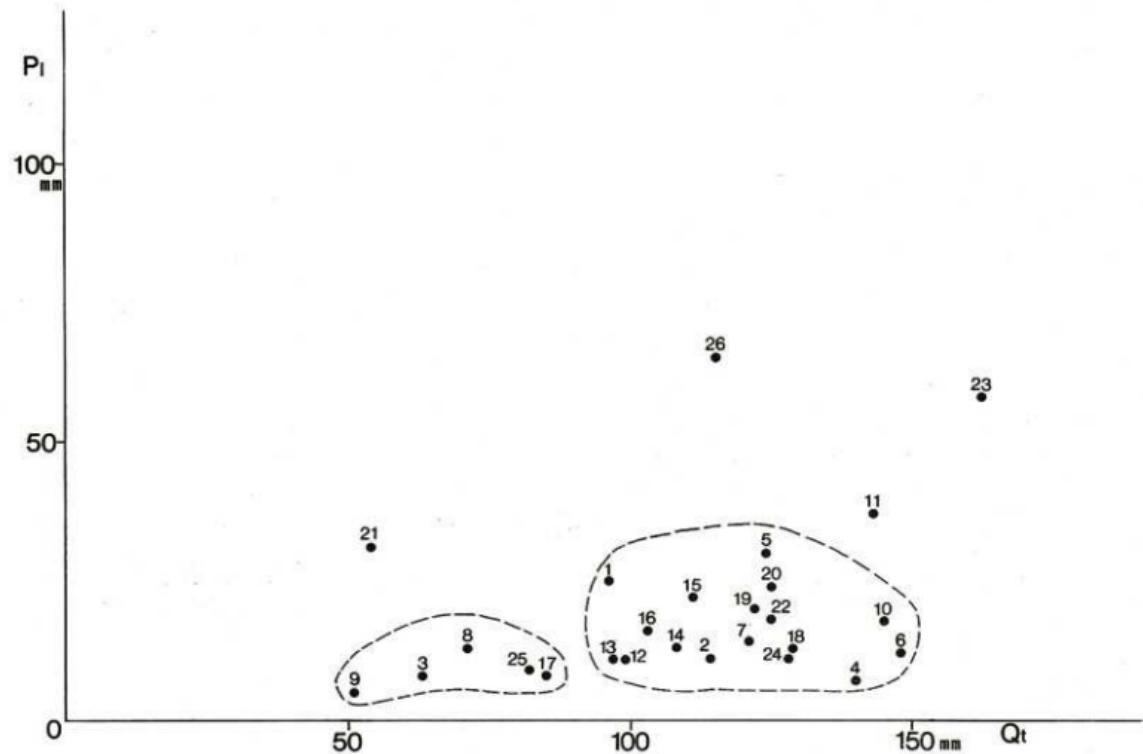
これら3つの胎土は斜長石 (Pl) が30以上と高く、Ⅰ、Ⅱのグループとは離れており、砂の混合比からすると同一集団とは考えずらい。

砂の混合比より土器はⅠ、Ⅱのグループの2つの大きなグループとその他に区分できた。前提条件に基づいて、考察するならば、Ⅰグループの土器はある時代における同一集団によって製作されたものであり、Ⅱグループも同様であろう。

ⅠグループとⅡグループが同時代の別集団を意味するのか、同一集団の時間の相違を意味するのかは別に土器の形態、出土層順による時代の決定との対比によらなくてはならない。

他のグループに属するものはⅠ、Ⅱグループとは異なる集団のいくつかを意味しているかも

第5図 Qt-PI相関図



しない。

3-3 まとめ

土器胎土はA～Gの7タイプに分類されるが個体数の多いものとしてはDタイプ(10個)、E、Fタイプ(9個)と最も多く、両者で総数26個の土器のうち19個に達する。Dタイプ、Eタイプとも、観音山の原土と対比され、在地性の可能性は最も高い。

主に細粒の石英、斜長石を混入する砂屑性ローム質粘土を使用し、植物の繊維を混入している点は共通している。

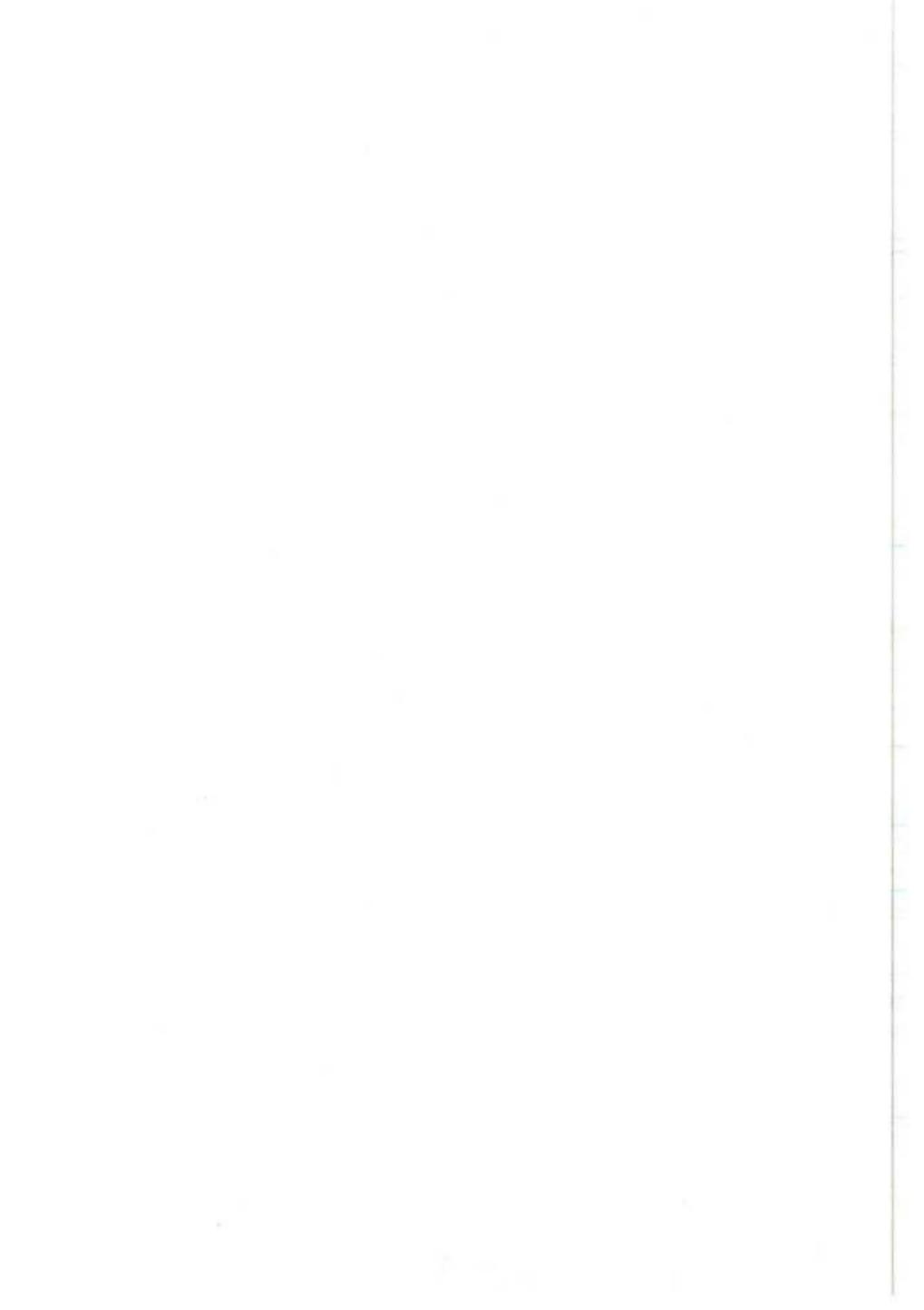
また、Aタイプも個体数は4個、同じ組成をもつBタイプも入れると合計5個になり、三ヶ尻林遺跡の土器胎土は大きく3つのタイプで占められていることになる。

これらに所属しないCタイプ、Gタイプは異なる粘土を使用しており、外来性の可能性が高い。

Qt—Pl相関図でも、大きくⅠ、Ⅱの2つのグループが大別され、その他は3個と非常に少なく、そのほとんどが在地性の可能性が高い。

(井上 嶽)

写 真 図 版



図版 1



三ヶ尻林遺跡第1号住居跡遺物出土状況



三ヶ尻林遺跡第2・3・4号住居跡

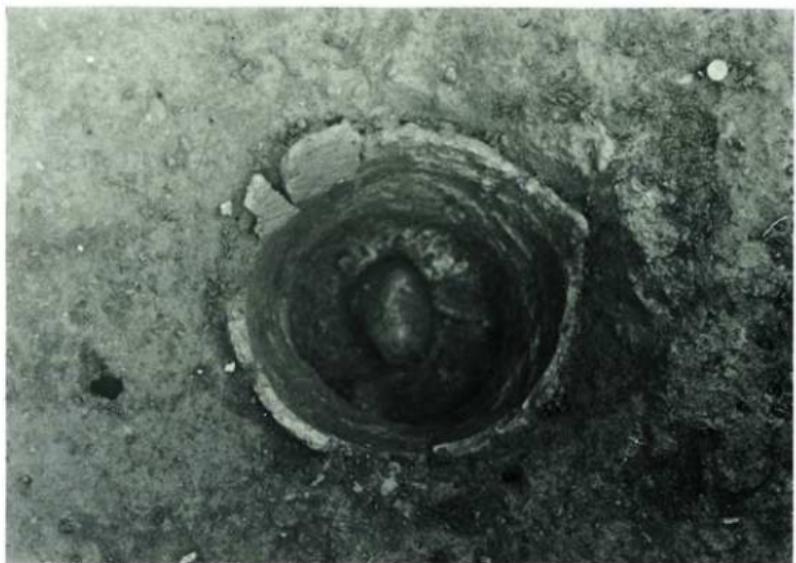
図版 2



三ヶ尻林遺跡第5号住居跡遺物出土状況



三ヶ尻林遺跡第5号住居跡埋甕出土状況



三ヶ尻林遺跡第5号住居跡第1号埋甕



三ヶ尻林遺跡第8号住居跡第1号埋甕

図版 4



三ヶ尻林遺跡第8号住居跡第2号埋甕



三ヶ尻林遺跡第9号住居跡遺物出土状況



三ヶ尻林遺跡第9号住居跡埋甕



三ヶ尻林遺跡第9号住居跡埋甕（同上）

図版 6



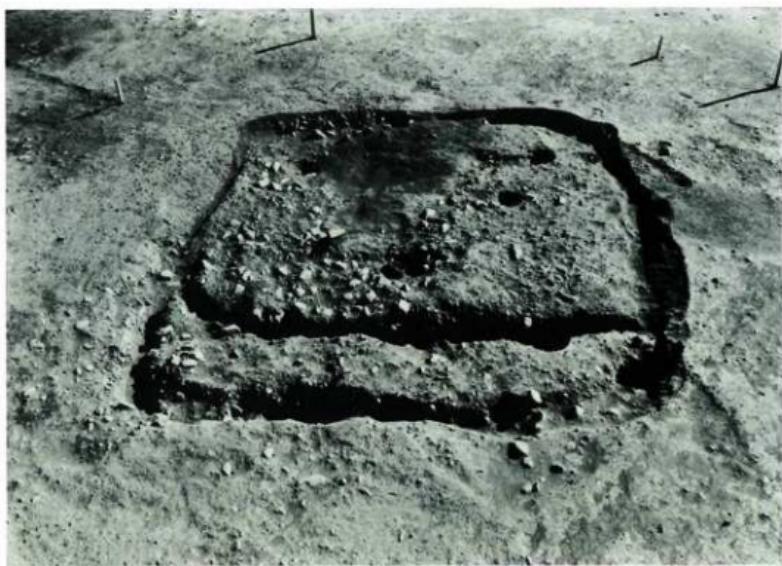
三ヶ尻林遺跡第10号住居跡



三ヶ尻林遺跡第11号住居跡



三ヶ尻林遺跡第11号住居跡埋甕

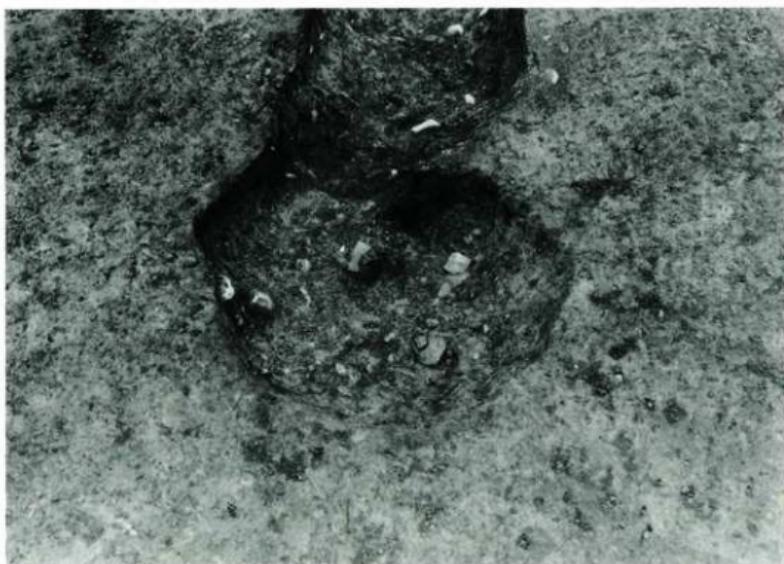


三ヶ尻林遺跡第12号住居跡

図版 8



三ヶ尻林遺跡第12号住居跡埋甕



三ヶ尻林遺跡第13号土塙



三ヶ尻林遺跡第40号土壤

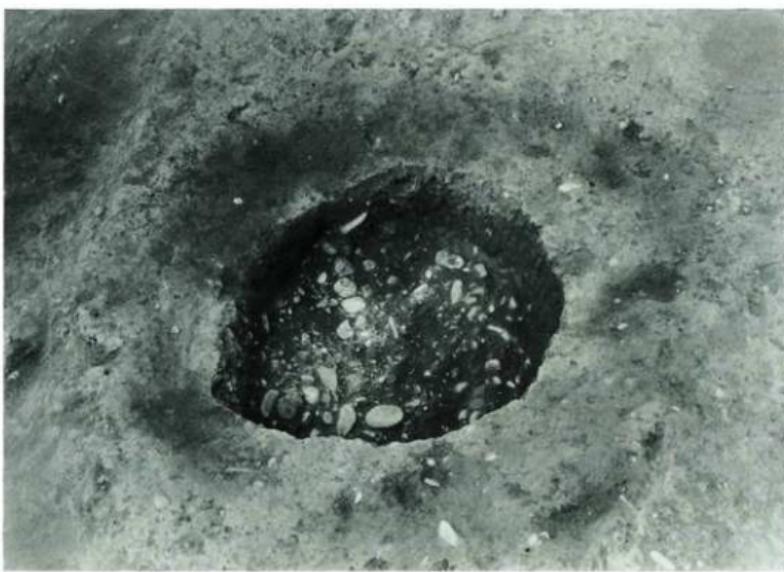


三ヶ尻林遺跡第44号土壤

図版10



三ヶ尻林遺跡第52号土壤



三ヶ尻林遺跡第55号土壤



三ヶ尻林遺跡第57号土壙



三ヶ尻林遺跡単独埋臺

図版12



三ヶ尻林遺跡発掘調査風景



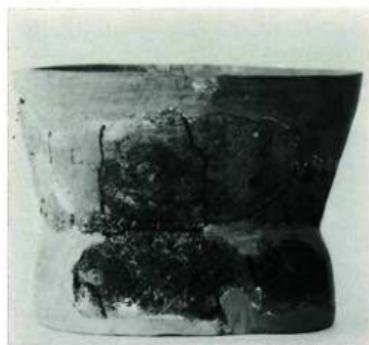
三ヶ尻林遺跡調査区全景（北から）



1-2



5-1



5-2



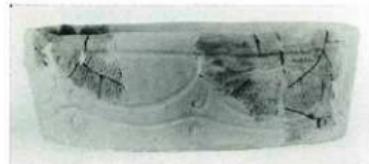
5-4



6-6



6-7



单独埋甕

三ヶ尻林遺跡第1・5・6号住居跡出土土器

図版14



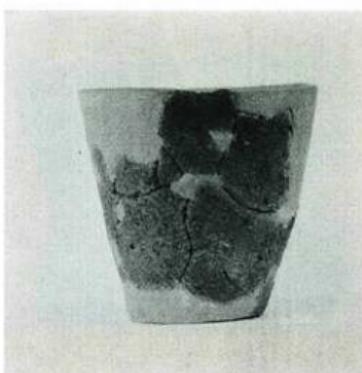
7-1



7-2



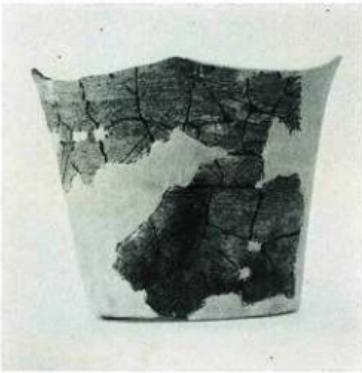
7-6



7-8



7-10



8-1

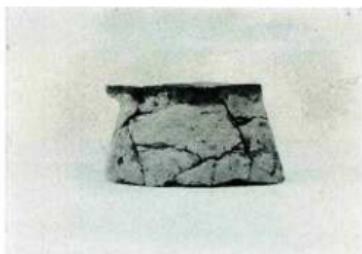
三ヶ尻林遺跡第7・8号住居跡出土土器



8-3



8-8



8-9



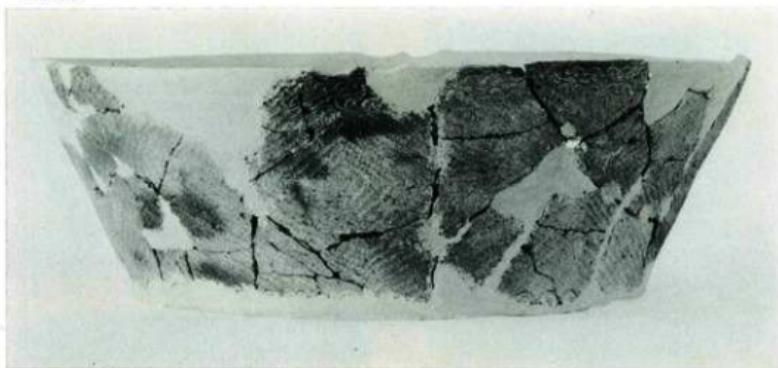
9-5



8-4

三ヶ尻林遺跡第8・9号住居跡出土土器

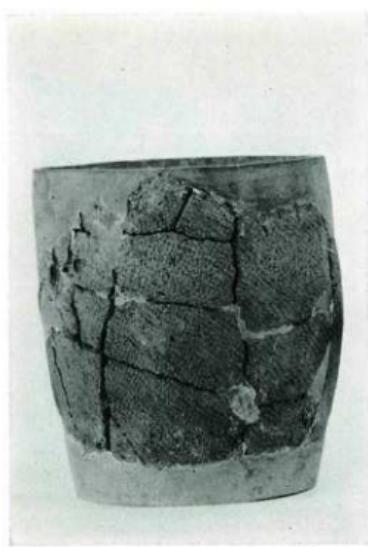
図版16



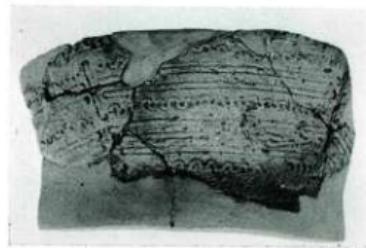
9-1



9-3

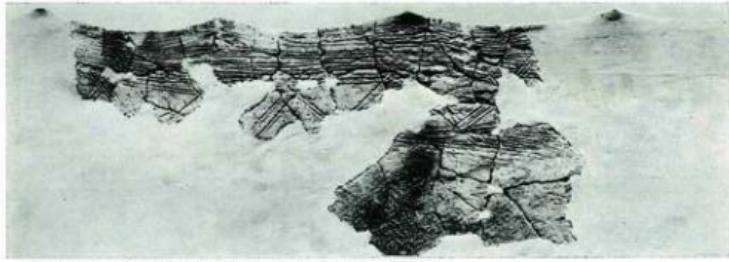


12-2



11-1

三ヶ尻林遺跡第9・11・12号住居跡出土土器

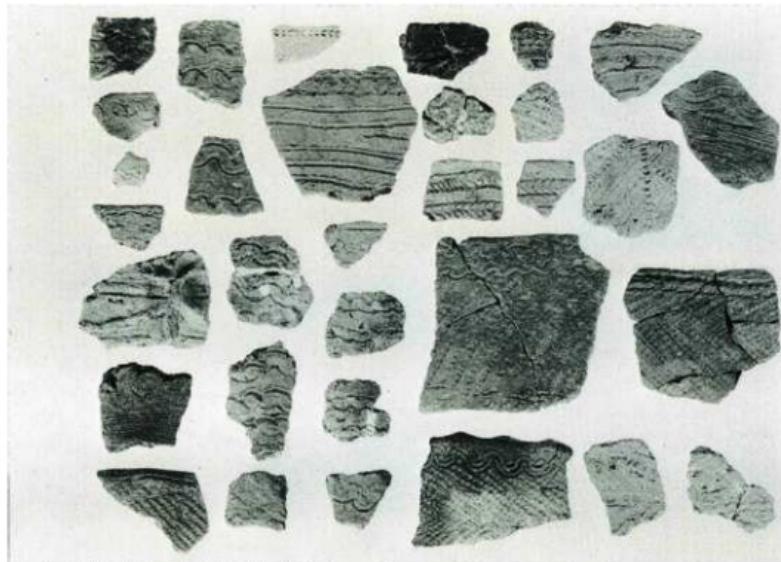


展開写真 三ヶ尻林遺跡第5・8号住居跡出土土器

図版18



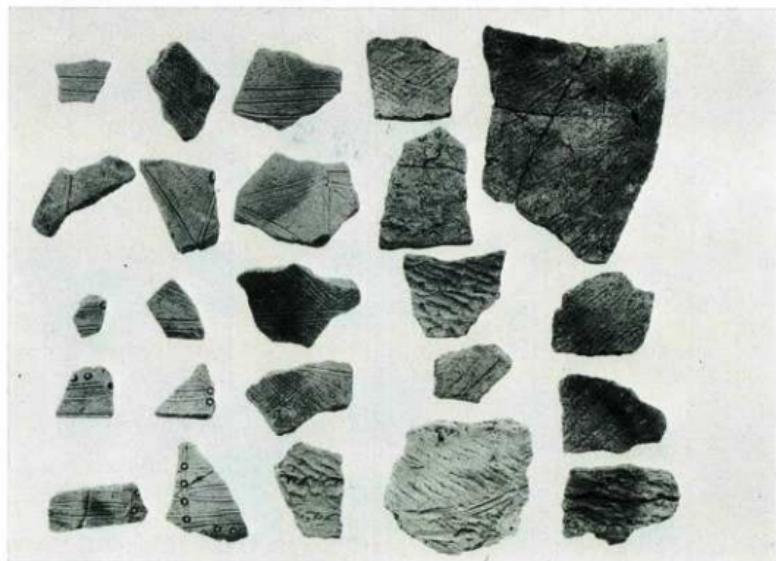
三ヶ尻林遺跡第1号住居跡出土土器—(1)



三ヶ尻林遺跡第1号住居跡出土土器—(2)

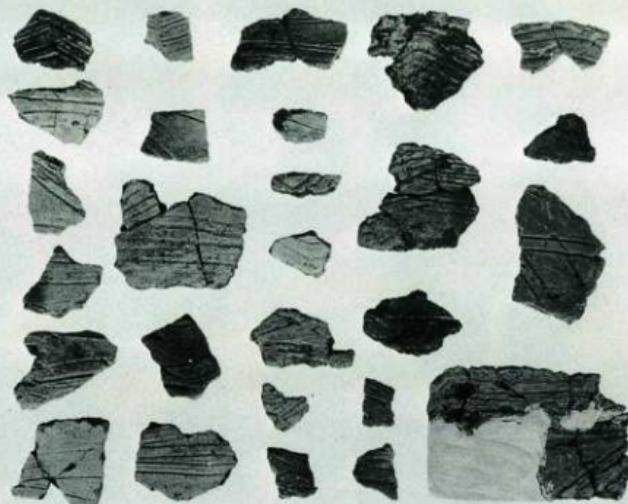


三ヶ尻林遺跡第1号住居跡出土土器一(4)

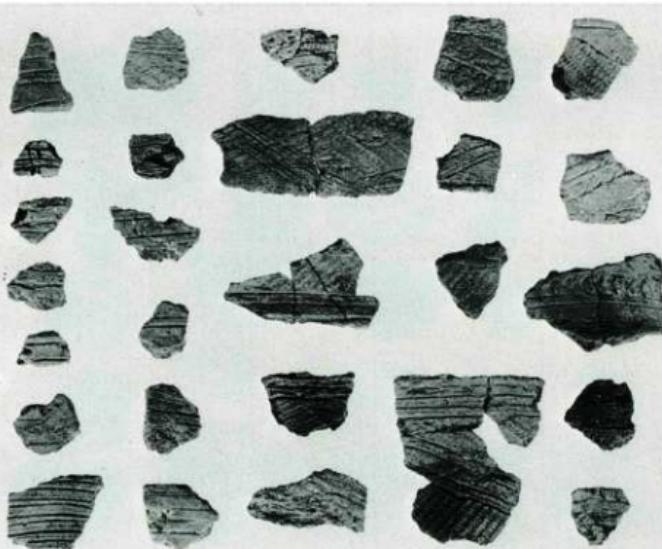


三ヶ尻林遺跡第1号住居跡出土土器一(5)

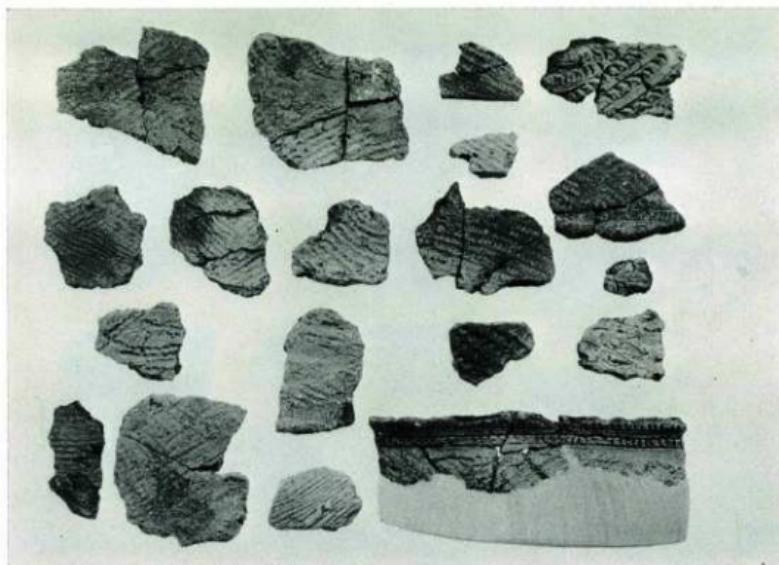
図版20



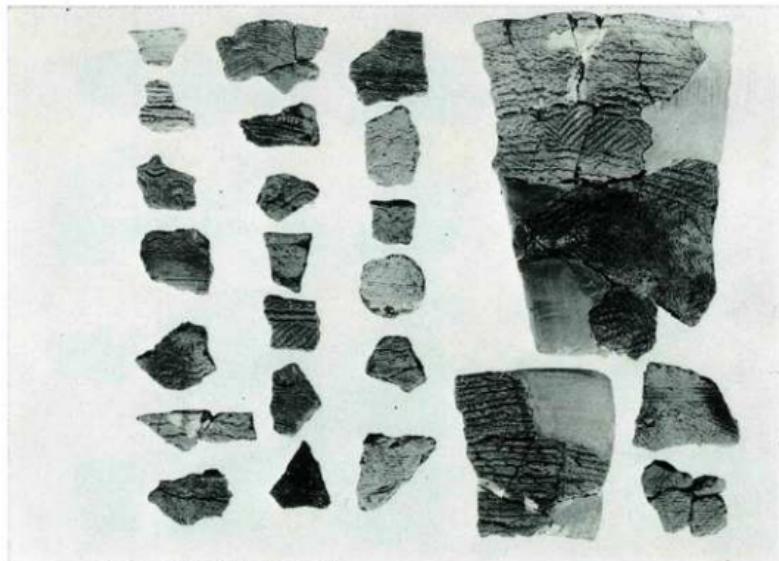
三ヶ尻林遺跡第2号住居跡出土土器-(1)



三ヶ尻林遺跡第2号住居跡出土土器-(2)

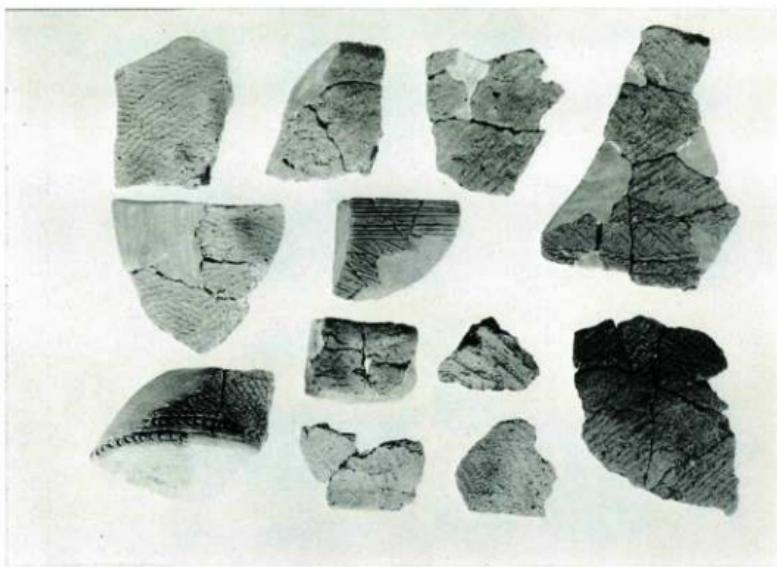


三ヶ尻林遺跡第2号住居跡出土土器—(3)

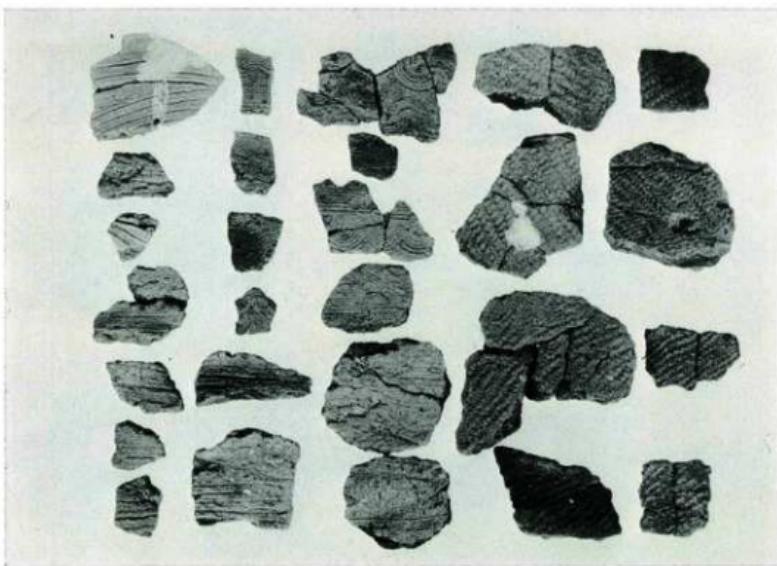


三ヶ尻林遺跡第3号住居跡出土土器—(1)

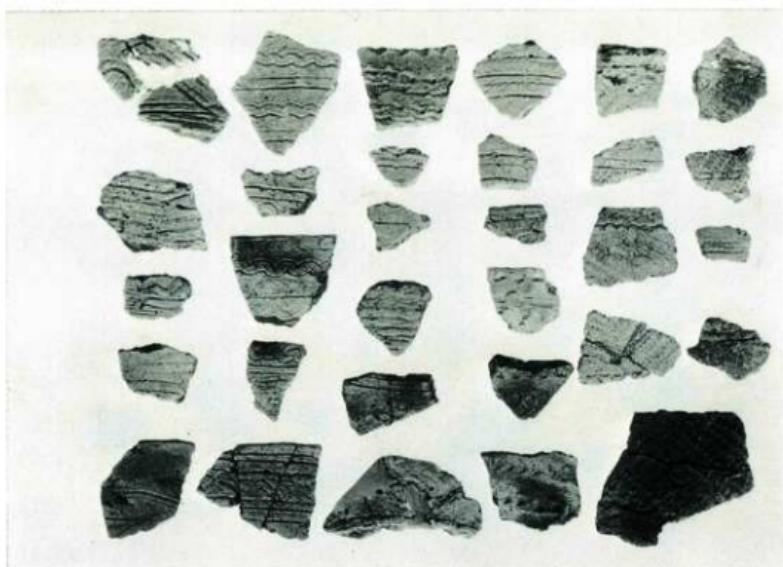
図版22



三ヶ尻林遺跡第3号住居跡出土土器一(3)



三ヶ尻林遺跡第4号住居跡出土土器一(1)

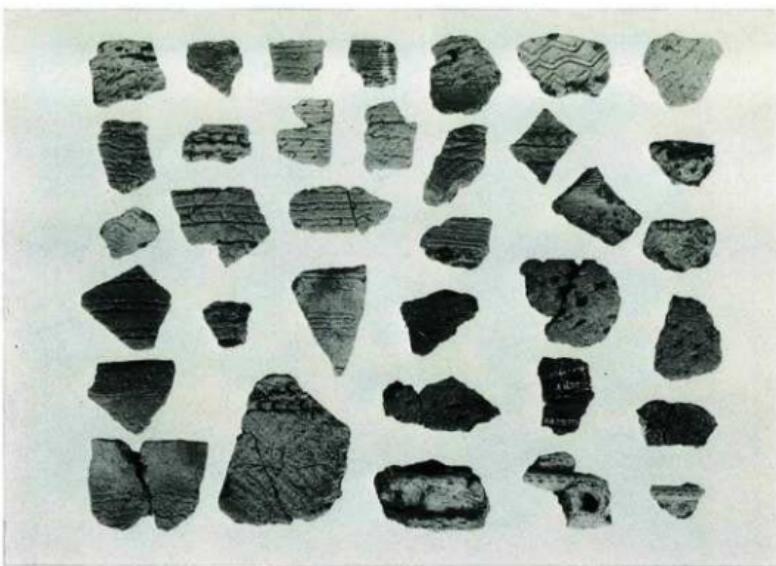


三ヶ尻林遺跡第5号住居跡出土土器—(1)

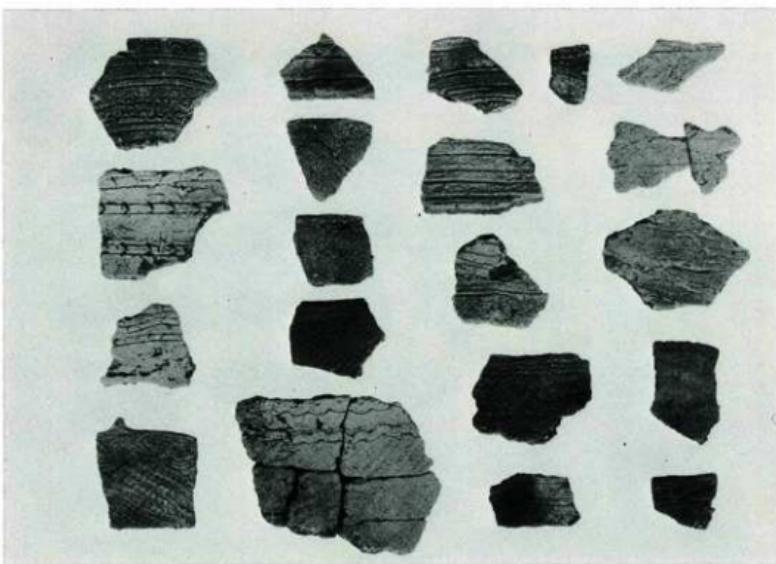


三ヶ尻林遺跡第6号住居跡出土土器—(1)

図版24



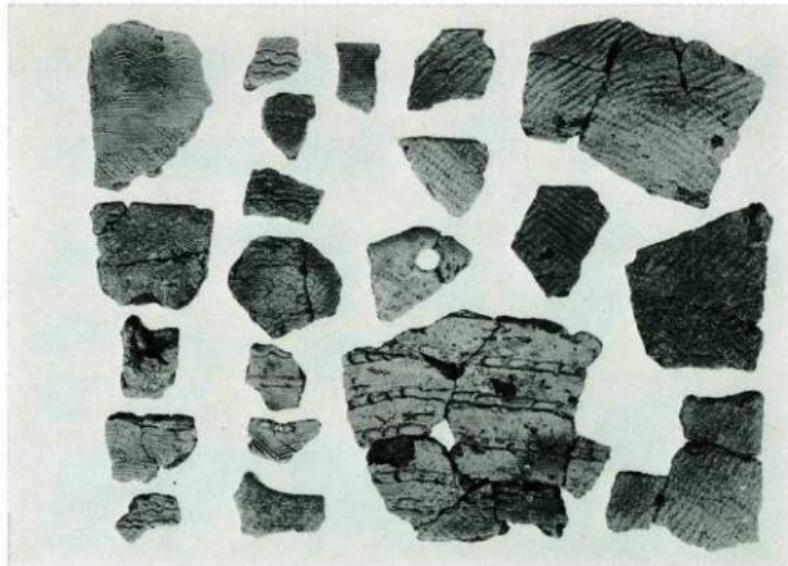
三ヶ尻林遺跡第6号住居跡出土土器—(3)



三ヶ尻林遺跡第7号住居跡出土土器—(2)

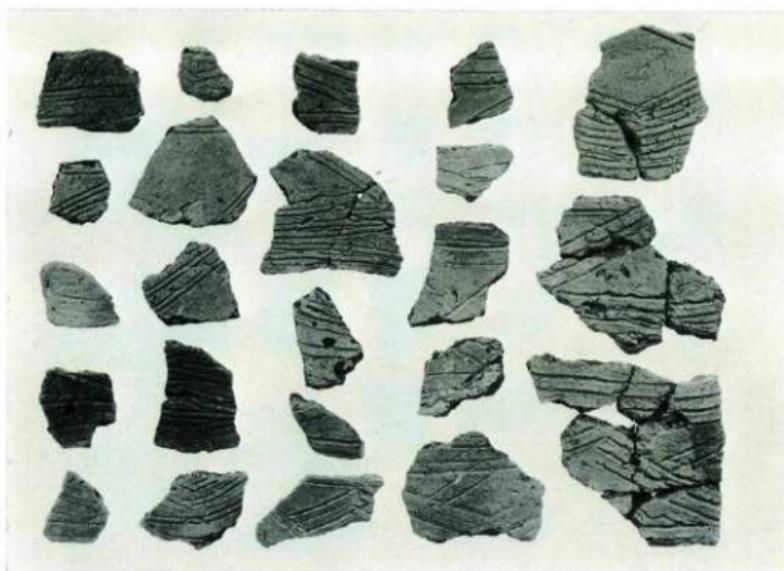


三ヶ尻林遺跡第8号住居跡出土土器—(1)

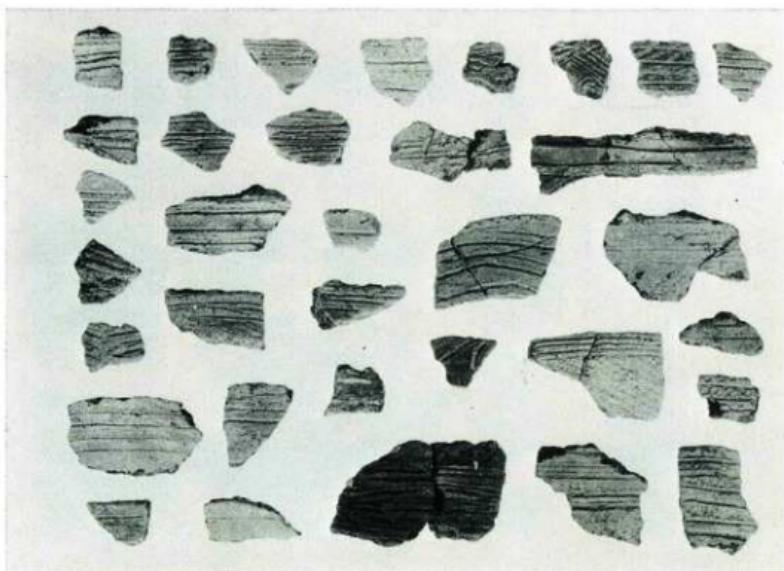


三ヶ尻林遺跡第8号住居跡出土土器—(2)

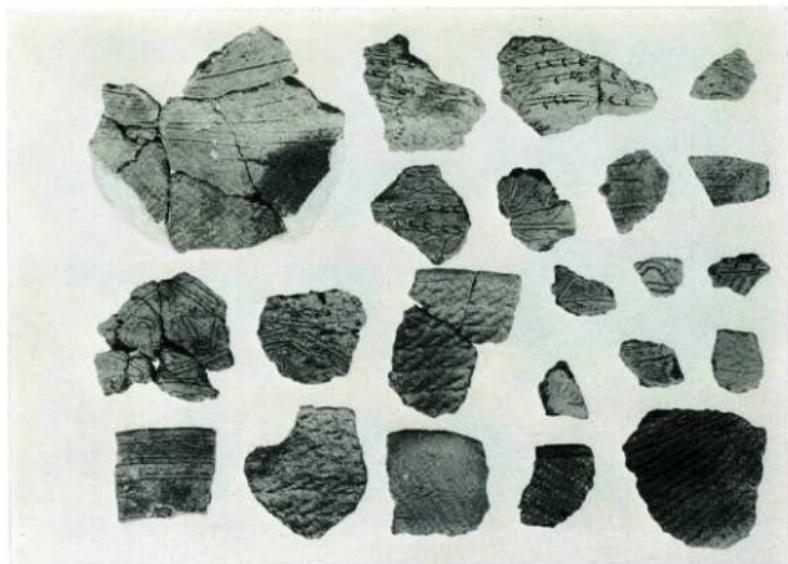
図版26



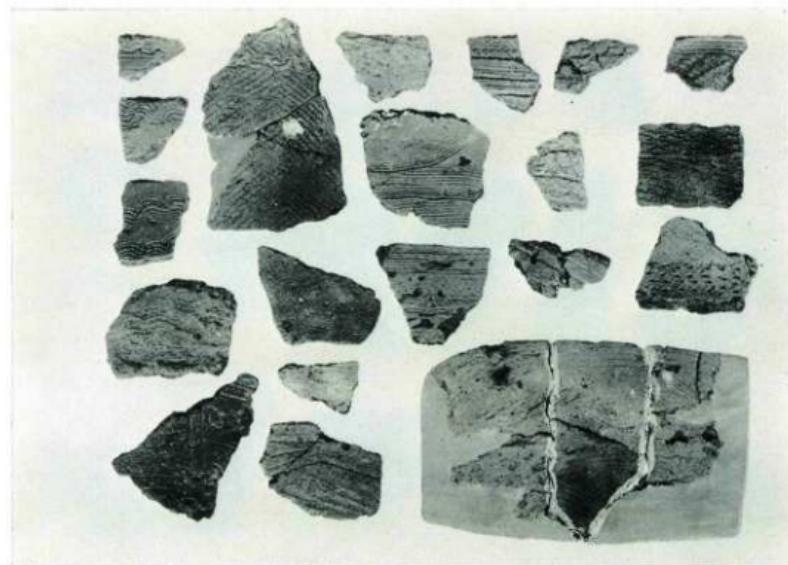
三ヶ尻林遺跡第9号住居跡出土土器-(1)



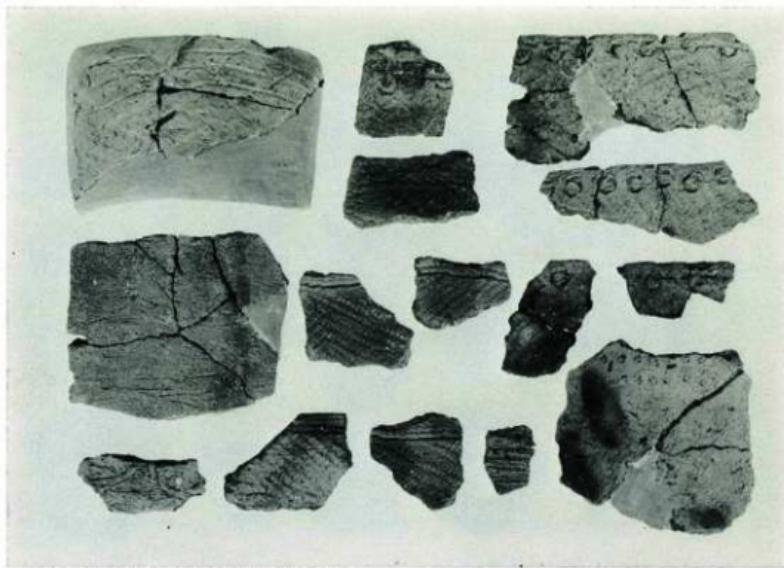
三ヶ尻林遺跡第9号住居跡出土土器-(2)



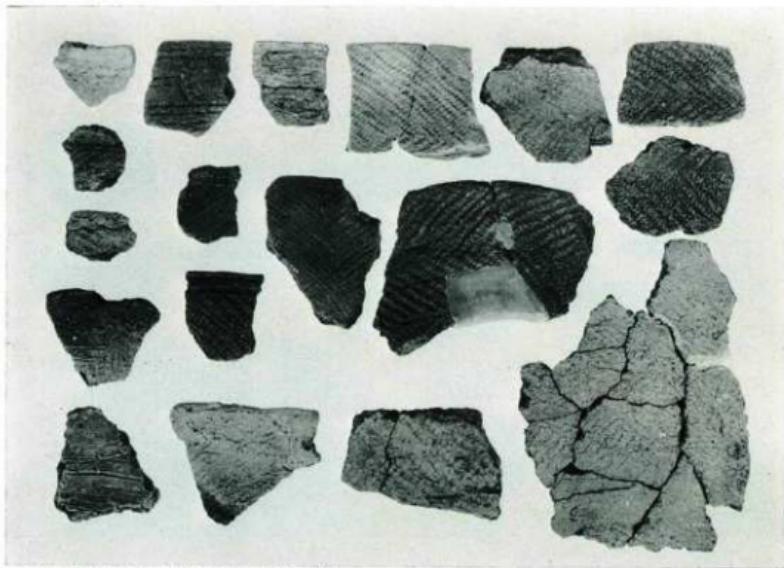
三ヶ尻林遺跡第9号住居跡出土土器—(3)



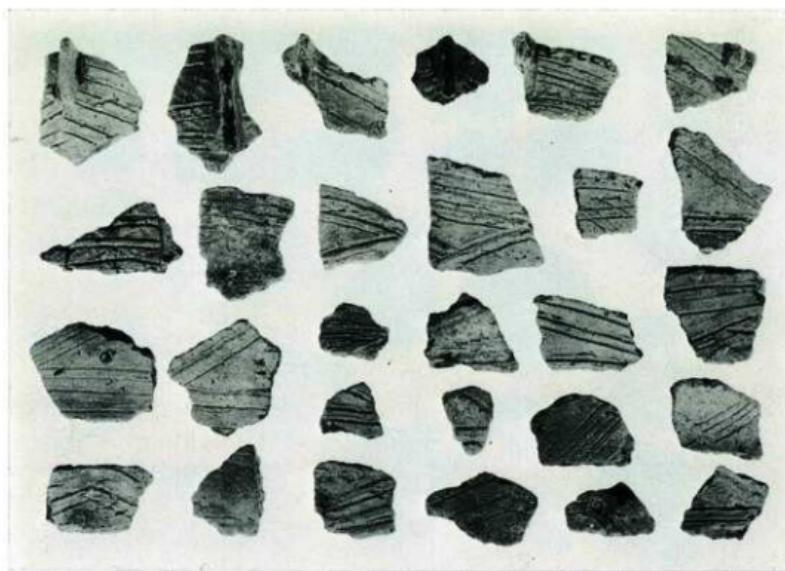
三ヶ尻林遺跡第11号住居跡出土土器—(1)



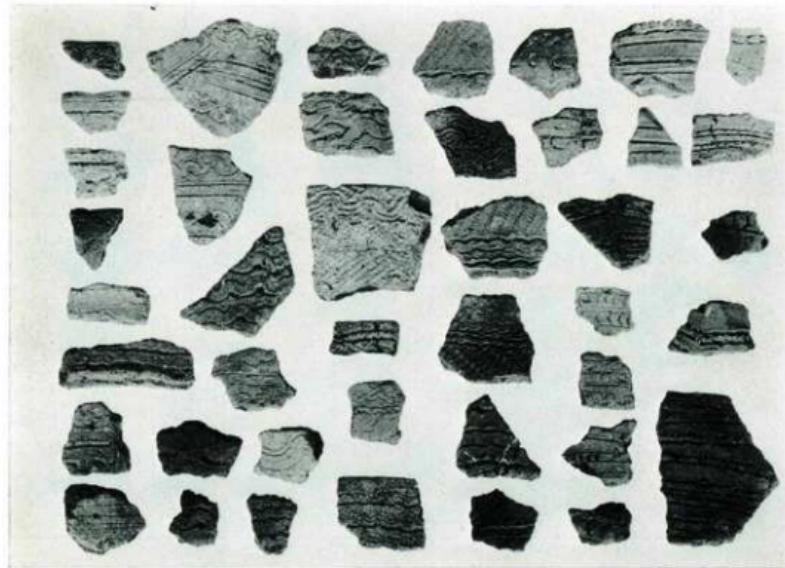
三ヶ尻林遺跡第11号住居跡出土土器-4)



三ヶ尻林遺跡第12号住居跡出土土器-2)

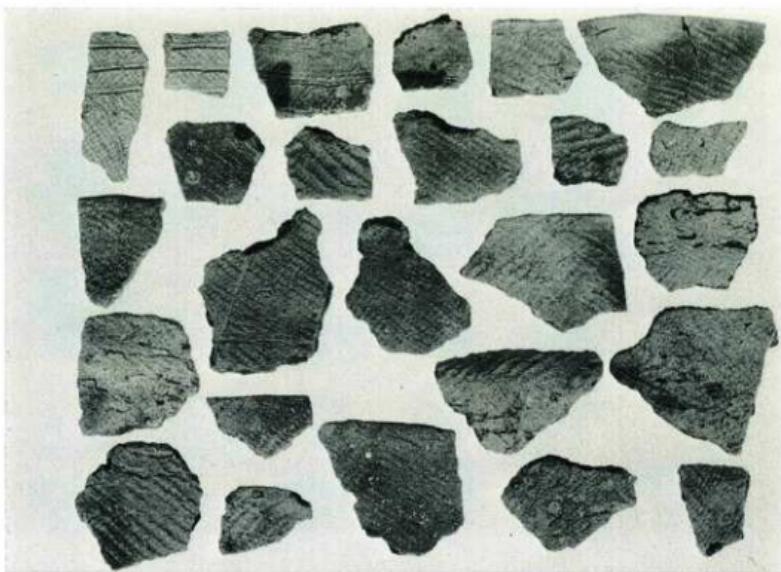


三ヶ尻林遺跡グリッド出土土器一(1)

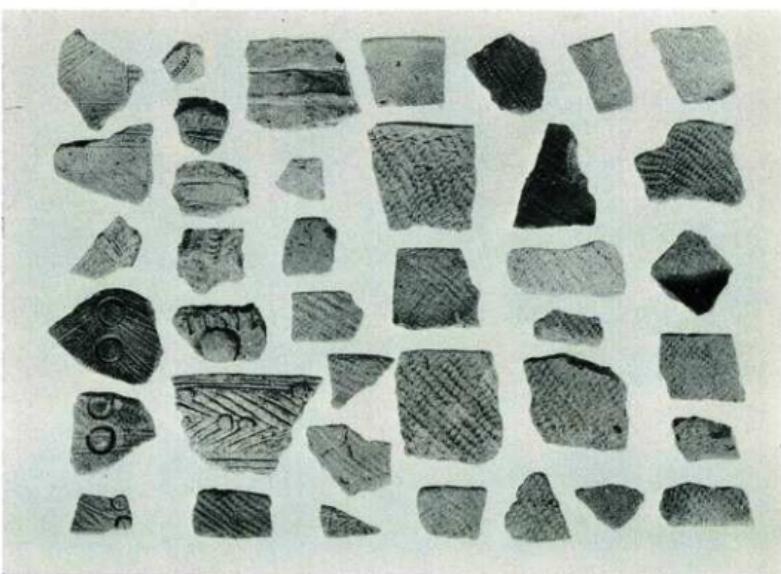


三ヶ尻林遺跡グリッド出土土器一(4)

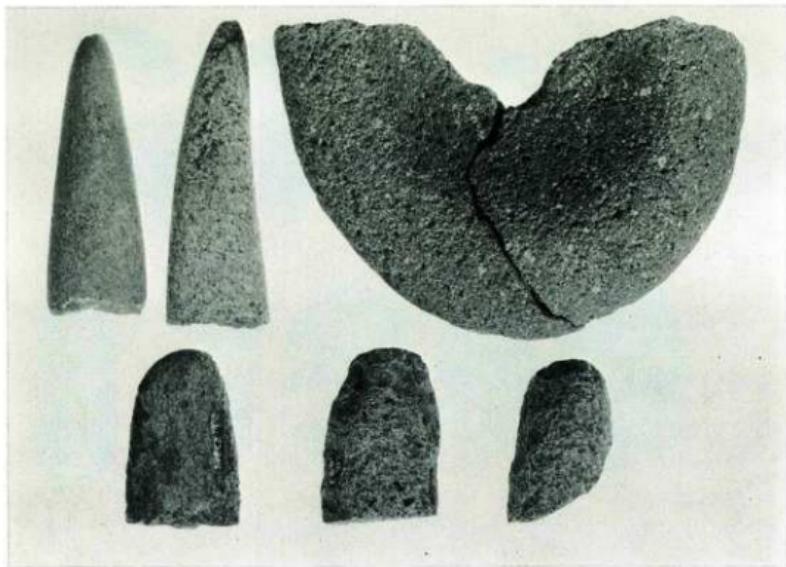
図版30



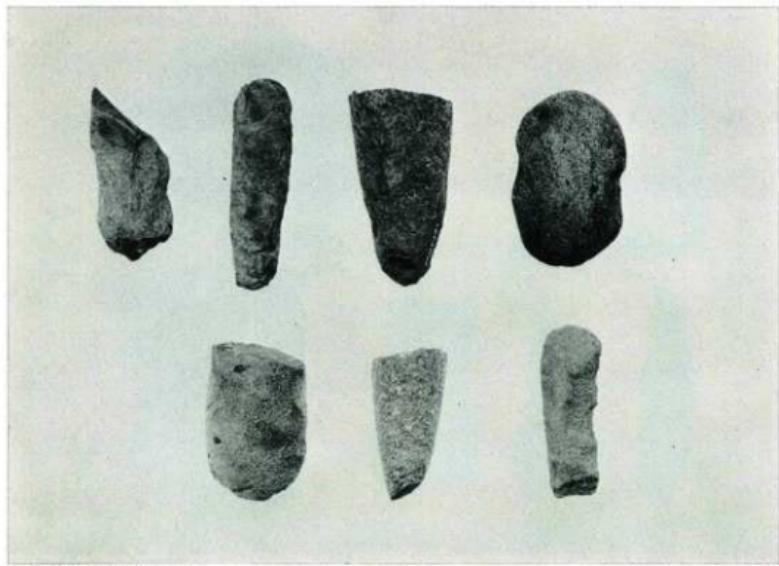
三ヶ尻林遺跡グリッド出土土器一(6)



三ヶ尻林遺跡グリッド出土土器一(8)

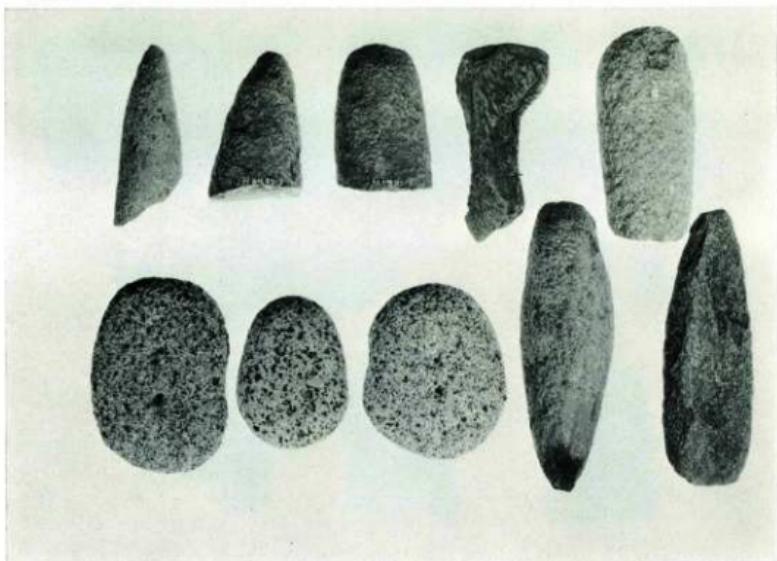


三ヶ尻林遺跡出土石器

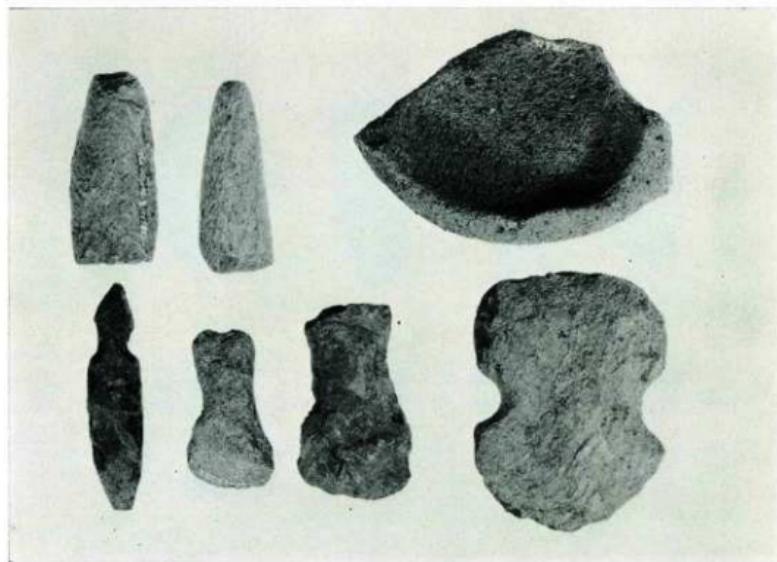


三ヶ尻林遺跡出土石器

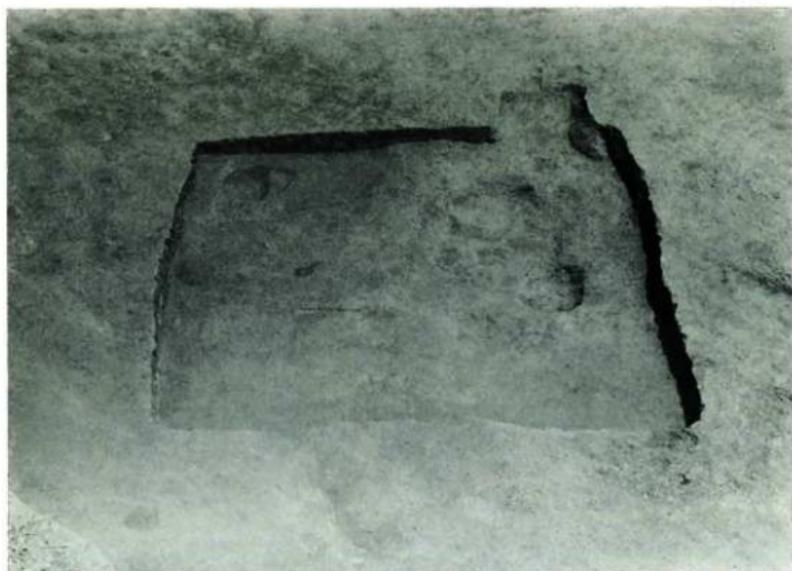
図版32



三ヶ尻林遺跡出土石器



三ヶ尻林遺跡出土石器



台遺跡第1号住居跡



台遺跡第1~4号溝

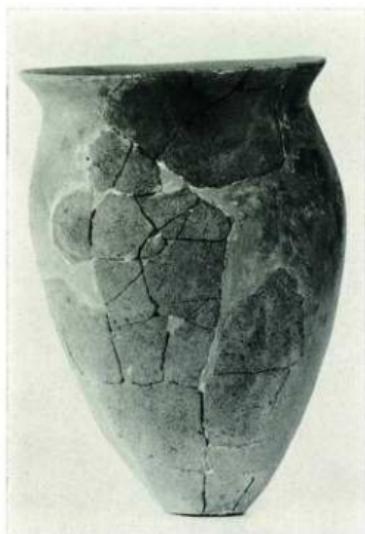
図版34



台遺跡第8号溝



台遺跡 全景



1-3



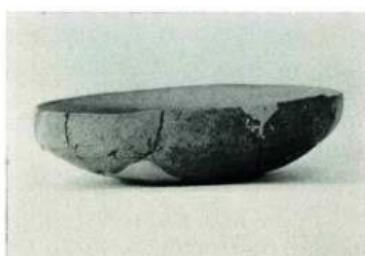
1-4



1-1



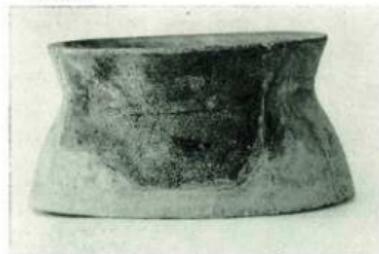
1-4



6-1

台遺跡第1号住居跡・6号溝出土遺物

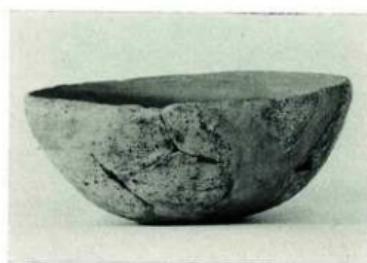
図版36



6-2



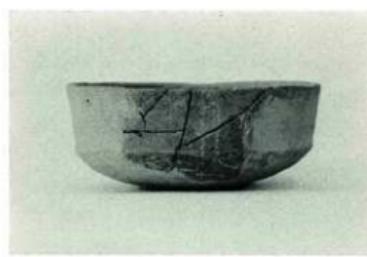
6-4



7-1



グリッド-9



7-2



グリッド14-2



グリッド-10

台遺跡第6・7号溝及びグリッド出土置物

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第34集

上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告 VII

三ヶ尻林(2)・台

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
印刷 新日本印刷株式会社

